

フィルメーナ・マルトゥラーノ

エドゥアルド・デ・フィリッポ 作

能 美 武 功 訳

(Carlo Arditio の英訳からの重訳)

登場人物

フィルメーナ・マルトゥラーノ

ドメニコ・ソリアーノ

アルフレード・アモロソ

ロザリーア・ソリメーネ

ディアーナ

ルチーア 女中

ウンベルト

リツカルド

ミケーレ

ノチエツラ 弁護士

テレズイーナ 美容師

ウエイター一

ウエイター二

第一幕

(舞台はソリアーノ家。)

(広々とした居間。正確に一九二〇年代流行の家具が置かれている。但し中庸をゆくもので、ケバケバしくない。一八〇〇年の終りから一九〇〇年にかかる世紀の変わり目の時代の絵画と装飾品も、注意深く壁と家具に飾られているが、これ

はこの家の主人、ドメニコの子供の頃のもので、部屋の他の調度品と調和しないこと甚だしい。左手前面に、寝室へと通じる扉。左手奥に大きな窓。その向こうに花で覆われたテラス。そしてそれに影を落している明るい縞模様のテントが見える。右手は奥が深くなっていて、そこを半分閉じた絹のカーテンで仕切られている。その向こうはドメニコの書斎。そこもまた一九二〇年代のイタリア独特のスタイルで設えてある。ガラスのショーケースあり。その中にドメニコの馬が競馬で勝った沢山のトロフィー。正面の壁、書き物机の上方に、小さな旗が二本クロスさせて飾つてある。モンテヴェルジンの競馬で優勝した記念。本も新聞も手紙類も、この部屋にはない。書斎は清潔で、よく整頓されているが、全く特徴がない。部屋の真ん中にテーブル。二人分の食器がきちんと並べてある。テーブルの中央に切つてきたばかりの薔薇。晩春。1夏に近い。夕暮れ。テラスから日没の最後の光。)

(寝室の扉の傍にフィルメーナが立っている。挑むように両手を組んでいる。長くて白い夜着姿。髪はバサバサ。それを急いで纏(まと)めたばかり。素足に寝室用のスリッパ。過去の長い間の精神的葛藤が顔に現れている。またそれを隠そうとしない。態度もの腰に飾りがなく、話し方は率直できっぱりしている。自分独自のやり方で人生に直面した方がよいと思つている女。四十八歳。若さが漲(みなぎ)っている。ただ、髪にところどころ白髪が混じつている。それが本当の年を表しているが、目に力があり、若々しい。典型的なナポリの黒い目。今は顔色が蒼い。死に顔のように。一つの理由は、たつた今演じたばかりの芝居の扮装にもよるが、もう一

つの理由は、その演じた芝居の結果起ることになっていて大嵐に対処するための緊張のせい。しかし、フィルメーナは怖れを見せてはいない。却って、傷ついた獣（けもの）が、敵に反撃すべく身構えているよう。）

（ドメニコはフィルメーナの右手に立っている。今起つたばかりの事件に怒り狂っている。五十代前半のがっちりした男。裕福でのんびり育つたせいで、生き生きした若い表情が保たれている。彼を甘やかして育てた父親、レイモンド・ソリアーノは、ナポリで最も成功したナポリいちの菓子商。ヴェルジーニ、フォルツエツラ、トレードとフォリアに店を持っている。トレードとフォリアの店は非常にモダンで上品。ドメニコの若い頃……当時はドン・ミニ・ソリアーノと呼ばれていたが……遊興があまりに豪勢だったため、未だにナポリの語り草となっている。競馬に非常な興味があり、旧友たちと何日も自分の持ち馬の大活躍の思い出話を語ること知られている。今は急いでズボンを履き、パジャマの上衣をひっかけ、やっとボタンをかけたという姿。蒼い顔をして、怒ってフィルメーナに対しては、何故なら、今やドメニコは、フィルメーナの支配下に落ちてしまっただからである。）

（ロザリアは部屋の左手、テラスへ通じる隅に立っている。柔和で謙（へりくだ）った態度。七十五歳ぐらい。髪は白と灰色。但し、白が目立つ。黒い、喪服に近い服装。腰が少し曲っているが、まだ元氣。ロザリアは昔、ヴィコ・サン・リポリオの、マルトゥラーノ家の向かい側の家の地下室に住んでいた。フィルメーナのことは小娘の時から知っている。そして、常にフィルメーナの力になり、相談相手になってき

た。それは、イタリアの労働階級の女ならよく知っている主従関係。身動きもせずじつとドメニコの動きを見つめている。心配で、片時も彼から目を離せない。怒った時のドメニコが、どんなに恐ろしいか、よく知っているからである。）

（アルフレードは右手奥に立っている。六十歳。がっちりしていかつい身体つき。厭味のない男。渾名はジョッキ。実際、若い頃はジョッキキーとしてならしていた。ドメニコが彼に職を与えてからは、主人のためなら何でもやるドメニコの右腕となっている。主人の身代わりにも、女を取り持つ男にも、相談相手にも。とにかく忠実に主人につかえている。ちょっと擦り切れている灰色の上衣。色違いのズボン。頭にはベレー。少し傾いで頭の上ののっている。ジョッキには金鎖。）

（幕が上ると、部屋の四隅にそれぞれの人物。無邪気な遊びでも始まりそうな配置。しかし実際は、敵意に満ちた二組の睨みあい。）

ドメニコ（自分の顔を怒って叩いて。）俺は馬鹿だ。馬鹿だ、馬鹿だ。大馬鹿だ。

アルフレード（穏やかに。）今度は何です？
（ロザリア、椅子からシヨールを取り、フィルメーナの肩にかける。）

ドメニコ 俺の身体はもめけの空だ。何も詰まってる。鏡の前に立って唾でも自分に吐きかけて、身体があるかどうか試してみなきゃならん！（フィルメーナを憎々しい目付きで睨んで。）お前にな、この俺は二十五年間のこの俺の命を、俺の健康を、俺の力を、俺の脳味噌を、使い尽したんだ。残りなどないぞ。これ以上お前はこのドメニコ・ソリアーノか

ら何が欲しいというんだ。この俺から絞れるだけ血を絞り取って、こつちは真つ蒼になつてゐるんだ。(矛先が三人全員に向けられ、怒り狂つて。) お前ら三人、この俺をいよいよに手玉に取つて(今度は自虐的に。)俺は自分でイエス・キリストにでもなつた気でいたんだ。そうしたらどうだ、その間にちやーんと俺を料理したんだからな。お前に、お前に、お前。それにこの町、この地方、ナポリ、いや、世界中だ。それがよつてたかつて俺を虚仮(こけ)にしたんだ!(ファイルメーナが自分を毘にかけた、そのことを思い出し、さらにかつとなつて。) ああ、あれを思い出しただけでこつちは氣違ひになりそうだ。そうだ、分つてもよかつたんだ。あんなことはお前しか考へつくことは出来ないんだからな。お前は昔からそうだった。三つ子の魂百まで、だ。二十五年ぐらいでお前のような女が変る訳はないんだ。だけどな、うまくいったなどと思つたらとんでもない間違いだぞ。ちつともうまくないつちやいなんだ! お前を殺してやる! それからお前に加担した奴全部だ。医者も坊主も・・・(ロザリアを指さす。ロザリア、怖れの小さな叫び声を上げる。そして次にアルフレードを指さす。こちらは到つて平氣。)そしてこの二人・・・何年も俺が食わしてきてやつたのに・・・悪党めらが・・・三人とも殺してやる。銃だ。・・・俺の銃を出せ!

アルフレード(落ち着いて。) オーバーホールで、修理屋に出してあります、お言い付け通り。

ドメニコ フン、俺もいろんなことを言つたもんだ。いや、たいして言つちやいないぞ。まだいくらでも言つことがあ

んだ。まあいい。もう終りだ。これからやることは決つた。(ファイルメーナに。) お前はこの家を出る。・・・穩やかに出て行かないとなりや、人夫に担がせてでも追い出してやる。世界中の誰が何と言つたつて、いや、神様が言つて来たつて、俺の決心は変わらないぞ。お前達全員、詐欺罪で訴えてやる!俺には金があるんだ。地獄の沙汰も金次第と言うんだ。いいかファイルメ、金に物を言わせて、お前をキリキリ舞いの目に会わせてやるからな。お前が育つてきたあのいかがわしい場所の連中はみんな俺の味方になる。俺はお前を叩き潰してやる。覺悟はいいか、ファイルメ!

(間。)

ファイルメーナ(穩やかに。自分に自信あり。) 終つたの? あなた。もう言つことはそれでお仕舞?

ドメニコ(猛然と。) 黙れ! 喋るんじゃない、一言も。...

・お前の言うことなど聞く俺だと思つてゐるのか。(彼女の声を聞くだけでも苛々してくる氣持。)

ファイルメーナ いつでも黙りますよ。私のここに(自分の胃の辺りを指さす。) 蟻(わだかま) っているものをすつかり吐きだしてしまえばね。それまでは黙るもんですか!

ドメニコ(侮辱をこめて。) お前は淫売だ。町の女なんだ、お前の正体は。

ファイルメーナ そんなことを今さら事新しく持ち出して何になさるうつて言うんです。私が昔何だつたか、あなたが私をどこで見つけたか、みんなが知らないでも思つていらつしやるのですか。私が働いていたお店に、あなたはよくいらした。あなただけじゃない、他の男達もね。私はあなたも、

あなた以外の男もおんなじように扱った。あなたを特別に扱ったでも思っているの？ とんでもない。それがこつちの仕事。それに男なんてみんな同じ。そうでしょう？ 私の過去の職業、それに、私のやったこと、それはみんな自分だけ、自分の良心だけに関すること。でも、今はもう違う。私はあなたの妻なんですからね。警察だって、私のことを追い出せはしない。いいえ、私に指一本触れさせもしいわ！

ドメニコ 妻？ 誰の妻だと？ フィルメ。お前、頭がどうかしちまったんじゃないのか。一体お前、誰と結婚したって言うんだ。

フィルメーナ（冷たく。）あなたとです！

ドメニコ お前は全く気遣いだ。あれが正式でも思っているのか。見え見えの嘘、汚いひっかけだ。ちゃんとそれを示す証人も揃っているぞ。（アルフレードとロザリーアを指さす。）

ロザリーア（躊躇わず。）私は何も知りませんよ。（こんな重大な事件には関りたくないという明らか態度。）私に分っているのは、ドンナ・フィルメーナが、病気にかかられて、寢床につかれて、だんだんお悪くなって、臨終の息づかいをなさり始めたということだけ。

ドメニコ（アルフレードに。）お前はどうかんだ。あの臨終が猿芝居だったと、お前には分っていなかったのか。

アルフレード ドン・ダウンミ、お願いですよ。ドンナ・フィルメーナが私のことを、見るのも厭なのは御承知の筈です。そのドンナ・フィルメーナが私にそんな大切な秘密を漏らすとでもお思いですか？

ロザリーア（ドメニコに。）では神父様はどうなんです？ 神父様を連れて来いと仰ったのは旦那様御自身だった筈ですよ。

ドメニコ それは勿論あいつが・・・（フィルメーナを指差して。）連れて来いと言ったからだ。俺はあいつが・・・安らかにと思っただんだ。

フィルメーナ これでこいつはくたばるんだ、うまく行った、やれやれ、やっとお払い箱だ、と大喜びだったのよ。

ドメニコ（苦りきって。）その通りだ。やっとお前に天からの使いが下った。神父はお前と二言三言交した後、俺に言った。「臨終の床にあるこの婦人を娶（めと）るのです。さあ。

それがこの婦人の遺言なのですから。神の御心に従い、この結婚の絆（きづな）を拒むことのないよう」と。だから俺は言った・・・

フィルメーナ そう。あなたは独りでほくそ笑んで言ったのよ。「結婚したところでどうだって言うんだ。何も失うものはない。どうせこいつは死ぬんだからな。もう二、三時間もすれば御陀仏。はい、さようならさ。」（嘲るように。）
ダウンミ、あなた、肝っ玉が吹っ飛んだでしょう、あの神父様がいなくなった途端、私はベッドから飛び起きて言ったんですものね。「さあ、ダウンミ、あなたにも幸運を！ 私達二人、これで夫婦なのよ！」

ロザリーア まあまあ、驚くやら、嬉しいやら。私、笑って、笑って、お仕舞には涙が出てきた。（思い出して笑う。）
本当にお腹が破けそうだった。

アルフレード（こちらも笑う。）あの、今にも死ぬという

騒ぎは何だったのでしょうかね。

ドメニコ うるさい！ お前達二人。いいか、今に、すぐにも死ぬのはお前達二人にしてやるぞ！（間。）そんなことは起らん。そんなことになつてたまるか。（突然、誰かのことが頭に浮ぶ。その人物だけにはちゃんと責任を取つてもらわねば、と。）フム・・・そうだ、あの医者だ。あの医者

の奴め！・・・何が科学だ、一体。死にかけている人間か、人を騙そうとして仮病を使っている人間か、それさえ区別がつかない・・・何て馬鹿な・・・

アルフレード いや、あの医者はただの診断ミスで・・・ドメニコ 黙れ、アルフレ！（腹を決めて。）よし、あの医者

に責任を取らせるんだ。あの医者に損害を賠償させねば。そうだ、あの医者はお前らとグルだったんだ！（フィルメーナに、意地悪く。）お前、あの医者を買収したな。そうだろう・・・

あの医者に何が分つていふと言つての！ ただ騙されただけよ。それにどうして騙されないでいられますか。あなたの傍で二十五年間も働いた女だったら、誰だって死の床につくに決つてゐるのよ！ 私はあなたの奴隷だったんですからね、二十五年間（ロザリアとアルフレードに。）可哀相な奴隷・・・二十五年間も。お前達二人が一番よく知つてゐる。この人はちよつとした楽しみのためにすぐ出て行く。ロンドン、パリ、それに競馬・・・残された仕事はみんな私の役目。フォルチェツラの工場、ヴェルジーニの仕事場、トレードとフォリアのお店。私がもし管理しなかつたら、従業員達にみんな持つて行かれる。それこそ身ぐるみ剥かれるのがおち。（ドメニコの口真似をして。）いやー、お前は素晴らしい女だよ、フィルメ・・・お前がいなけりや、俺は何一つ出来んさ・・・こうやつて私はこの人を甘やかしてきたの。聞いて気分がよくなるようなことばかり聞かせてやつた。今じゃない、その昔。可愛い女の子だった頃に。だけどこの人、私に一度だつて感謝したことはありはしない。一度だつて！ まるで私を奴隷扱い。蹴飛ばして、こき使つて・・・

ドメニコ お前こそこの俺に、かけらでも理解を示したことがあるのか。俺達二人の間で、事がどうなつてゐるか、考えようとしたことがあるのか。いつも渋い仏頂面ばかりして。俺は自分によく聞いてみた。俺が何か悪いことをしたかな？ あいつを怒らせるような何かしたのかな。とんでもない。お前はただ、冷たくて、厳しい女なんだ。お前を知つてからこのかた、俺はお前が泣くのを見たことがない。普通の人間は泣くものなんだ。

フィルメーナ フン、泣くなんてことが出来ずか、あなたの前で。

ドメニコ 確かに、お前は奇妙なところのある女だ。涙を流すのを俺は見たことがないが、ひよっとすると、食べたり飲んだり眠ったりもしない女じゃないのか？ そうだ、今思い出してみると、俺はお前が眠っているのも見たことがないぞ。そうだ、お前はどこか、別の星からやってきた生物だ。

フィルメーナ 私の眠っているのを見たことがない……当たり前でしょう、そんなことは。自分でわざわざその機会を潰しておいて。あなたは夜まとも家に辿り着いた時が何日あるっていうの。クリスマスだって、イースターだって、私はいつも独りぼっち。それから泣く話。あなた一体、人がどういう時に泣くか知っているの？ 人が泣くのは、幸せがどういうものか知っていて、それで幸せになれない時、その時に泣くの。幸せがどういうものか知らなくて、惨めさしか知らない時に、人はどうして泣けるの。そう。フィルメーナ・マルトウラーノは泣いたことがない。あなたは正しいの。あなたはね、この私を塵芥（ちりあくた）のように扱った。私は幸せを知らされなかった。その私が何故泣けるの。（ロザリアとアルフレードに。この二人は今フィルメーナが喋っていることの証人。そしてその証人はこの二人しかいない。）それにまあ、一体何でしょう。この人がまだ若い時なら分るわ。顔もいいし、お金もあるんだからって、人は言うかもしれない。でも、今、この年で。この人、五十一歳。それで真っ赤な口紅のついたハンカチを持って家に帰って来るんですからね。色気違いの豚！……（ロザリアに。）どこ？ あ

れは。

ロザリア 私の物入れの中に。鍵をかけて。

フィルメーナ それでこの人がそのハンカチのことを気にすると思ったら大間違い。私に見つかつたら困るな、棄てておこうか、なんてとてもとても。まるでその逆。あいつに見つかればいいんだ。一体それでどうするつもりだ。あいつが俺に何の権利があるっていうんだ。そして自分はまるで盛りつけた犬よ。追っかけ廻して。

ドメニコ（急所をつかれて、怒って。）何だ、それは。どういうことだ。

フィルメーナ（矛先を緩めない。ドメニコの口調に合わせて。）盛りのついた犬！ あの売女（ばいた）を追いかけて！ あなたの狙いがどこにあるか、私に分っていないと思っっているの？ 困った事にね、あなたは嘘が下手なの。あなたはもう五十二よ。それで何？ 二十二の小娘とよろしくやって行きたいっていうんですからね。恥ずかしくないの？ その子を看護婦にしたで、家にまで上らせて……勿論この私は、今すぐにでもくたばるんだからと……（呆れ返って物が言えない、という調子。）そう。今からたった一時間前、神父さまがまだ来ていない時、私はもう長くはない。おまけに目も見えなくなつた……そうしたら何？ 私のベッドの足元で、その小娘と、抱きあうやら、キスするやら！（うんざりという顔。）全く、何て豚なの！ あなたは。そして本当に私が死んだら、何をあなたはやるつもりなの！……（テーブルを指さす。）ほら、見て。二人分のナイフとフォーク。あなたとあの偽看護婦、その二人分よ！ 私が死んだそ

の瞬間に、二人で仲良く晚餐。全くいい気なもの！

ドメニコ　フン、するとお前が死ねば、俺は飯を食っちゃいかんという訳か。餓死でもしろと言いたいのか。

フィルメーナ　・・・それに見て。テーブルの薔薇・・・ドメニコ　薔薇がどうした。

フィルメーナ　赤よ、その薔薇。

ドメニコ（怒って。）赤だろつと緑だろつと、紫だろつと、知ったことか。何色にしようつと、俺の勝手だ。お前が死んで、俺は嬉しい。その嬉しさを表してどこが悪いというんだ。

フィルメーナ　でも、私は死んではいませんからね。（意地悪く。）それからね、ダウンミ、まだ暫くは死ぬつもりもありませんの、お生憎様。

ドメニコ　糞つ、そいつが問題なんだ。（間。）しかし、よく分らないな。お前にとつちや、俺は他の男どもと何の違いもないんだ。いつでもお前はそう言ってる。じゃ、何故俺との結婚にそんなに拘（こだわ）るんだ。それに、もし俺が女に惚れて、そいつと結婚したいからと言って・・・俺はあのダイアーナと結婚するんだからな。いいか・・・それがお前に何の関係がある。そいつが二十二だろつと何だろつと、知ったことはない筈だぞ。

フィルメーナ（皮肉に。）全く笑わせるわね。あなたって言う人、本当に可哀相な人。そう。あなたの言う通り。知ったことじゃないの、あなたのことなんか。あなたが何をしようつと。首ったけになった女がいようと、どうだろつと。私が大芝居をうったのは、あなたのためだなどと思つたら大間違い。私のような女は・・・そう、あなたは口癖のようにしょつ

中これを言っていたけれど・・・計算なしでは何一つ行動しない女。ところが今、あなたは私にとつて役に立つ人間になった。忘れるんじゃないのよ。二十五年間私は働いたんですからね。黙つて私が荷造りをして、この家を出て行くだろつと思つたら大間違い。

ドメニコ（勝ち誇つたように。突然、フィルメーナが何故このような大芝居をうったか理解して。）なあんだ、それなら金なんだ。だが変だな、そんなことなら黙つていてもお前にしてやった筈だ。お前自身がそれを一番よく知っている。レイモンド・ソリアーノの息子、ドメニコ・ソリアーノ。ナポリ中で一番大きな、一番誇り高い菓子屋を持っているこの俺様が、お前をただでほっぽり出すとは、まさかお前、考えてもみないだろつ？　どこかのアパートをお前に都合つけてやり、必要な金銭的な問題はすべて片をつけて・・・

フィルメーナ（ドメニコの鈍さに呆れて。）まあまあ、呆れたわね。あなたって何も分つちやいない。金ですって？　金なんか自分で好きなようにすればいいの。私が欲しいのは違うもの。あなたは私にそれをくれるの。よく聞いて、ダウンミ、私には三人の息子がいるの。

（ドメニコとアルフレード、驚きで蒼くなる。ロザリアは全く平静。）

ドメニコ　三人の息子？　フィルメ、お前、何を言ってるんだ。

フィルメーナ　私には三人の息子がいるの。

ドメニコ（処置なし、という顔。）それで・・・誰なんだ、父親は。

フィルメーナ（冷たく。ドメニコの恐怖は承知の上。）（まあ、あんたのような男ね。

ドメニコ フィルメ、いいか、子供となれば真剣な話だ。冗談じゃすまされないぞ。何だ、その「あんたのような男達」とは。

フィルメーナ だって、男はみんな同じようなものですからね。

ドメニコ（ロザリアに。）知っていたのか、お前は。

ロザリア ええ、存じておりましたわ。

ドメニコ（アルフレードに。）お前は。

アルフレード（いつでも返事は「自分は悪くない」という調子。）どうして私知っていますよ。・・・ドンナ・フィルメーナは私のことがお嫌いなんです。御存知でしょう？

ドメニコ（とても信じられない。独り言のように。）息子が三人！（フィルメーナに。）何歳なんだ。

フィルメーナ 一番上が二十六。

ドメニコ 二十六・・・

フィルメーナ そんな怖い顔をしないでいいの。御安心なさい、あなたの子供じゃないんだから。

ドメニコ（何となくほっとして。）しかし・・・連中はお前のことを知っているのか。お前は会うことがあるのか。連中はお前が母親だと知っているのか。

フィルメーナ いいえ。私が母親であることは知りません。でも、私は時々は会うわ。お喋りをする事だってあります。

ドメニコ どこに住んでいるんだ。何をして食っている。

フィルメーナ あなたのお金が食わせたのね。

ドメニコ（驚いて。）俺の金が？

フィルメーナ そう。あなたのお金。あなたから私が盗んだの。あなたの鼻の先で、あなたの財布から盗んだの。

ドメニコ（軽蔑の表情。）盗っ人！

フィルメーナ（動じない。）そう。あなたから盗んだの。そう、盗んだだけじゃない。売ってお金も作った。あなたの洋服、靴・・・あなた、ちっとも気がつきやしない。あのダイヤの指輪、無くしたと思っていたでしょう。あれはなくなっちゃない。私が売ったの。こうやってお金を作って、私の子供達を育てたのです。

ドメニコ（うんざりして。）そうか。俺は今まで泥棒を家に飼っていたのか。（間。）何ていう奴だ、お前は。

フィルメーナ（この台詞を無視して。）三人のうちの一人は、すぐ傍の角に店を持っている。鍔掛屋（いかけや）をし、ているわ。

ロザリア（訂正して。）水道屋。

ドメニコ 何だって？

ロザリア 水道屋です。蛇口を直したり、座金を取り換えたり。市の噴水の修理もするわ。（二番目の息子に移る。）そう、次の子供・・・何て言ったっけ・・・ああ、そうそう、リッカルド。何てハンサムなんでしょう。旦那様にお似合い。あの美男子。ヴィア・チアーリアに店を持っている。ワイシャツ作り。そう、オーダーメイドのワイシャツの店。馴染みの客なんか、もうたくさん。次がウンベルト。

フィルメーナ ああ、あの子はインテリ。勉強が大好き。会計士になっている。新聞にも記事を書くわ。

ドメニコ（せせら笑つて。）「おやおや、この家から作家まで出たか。」

ロザリーア（フィルメーナの母親としての業績を讃えて。）

あの三人に、なんて素敵な母親役をやつてきたことでしょう。本当に面倒見のいい母親！　いろんなものを買ってやつて……そう、私はもうこんな年寄り。嘘などつく必要は何もないの。あの三人、お金で手に入るものなら何でも持つていた。

ドメニコ　糞っ！　誰の金だと思つているんだ！

ロザリーア（苛々と。自制を捨てて。）「誰の金？　ドブに捨てているような金づかいをしている癖に！」

ドメニコ　お前らの知つたことじゃない、そんなことは。

フィルメーナ　放つて置きなさい、ロザリーア。

ドメニコ（癩癩を抑えようと努力しながら。）「フィルメ、いくら何でも、これはやりすぎだぞ。物には限度というものがある。俺のことをかかしたと思つているのか。その三人の男だがな、俺には全くの赤の他人だ。どこの馬の骨とも分らん連中だ。いいな。その馬の骨が、今、この瞬間、こう考へているというんだな？　「まあいい、どうせ俺達の後ろにはドメニコの金がついてるんだ」と。」

ロザリーア（途中で遮つて。）「いいえ、それは違います。」

あの子達は何も知りません。ドンナ・フィルメーナは、いつでも物事を折り目正しく処理なさいます。注意深く、用心深く。水道屋のミケレが店を出す時には、ちゃんと間に弁護士を立てて金を渡したのです。弁護士はミケレに言いました。匿名でお前の助けになりたいという婦人がいてな、その人からの金なんだ、と。シャツの仕立屋リツカルドにも同じ

方法。会計士になつたウンベルトにはもっと細かく月ぎめで、大学を出るまで仕送りをしたのです。旦那様は全く何の関りもありません。

ドメニコ（苦々しく。）「フン、俺の役目はただ、金を出すだけか！」

フィルメーナ（すぐに。）「そんな子供達、生む前にさつさと始末しておけ。」あなたはそう言いたいんでしょう。どんな女だつてそうしている。「お前もさつさとそうしておけば良かったんだ」と。そうでしょう。「フィルメーナ、よく考へるんだ。始末するんだ。墮胎だ。」さ、答えて頂戴。その時あなたに分つていたら、そう言つたのね？　あの頃一緒に働いていた女達はみんな私に言つた。「何をぐずぐずしている。さつさと片付ければそれで終りだろう？」あなたも同じね？　きつと。

でも私は違つた。私は考へた。もしそんなことをして、一生後悔するようなことになったら。そして考へて、考へた。そうしたら……ああ、何て有難いこと……目の前に現れた方がいたの……薔薇の天使様……（ロザリーアに。）「薔薇の天使様……お前、覚えてるね？」

ロザリーア　覚えてるからですって？　私達の守り神、毎日恵みを与えて下さる薔薇の天使様！

フィルメーナ（不思議な出逢いを思い出しながら。）「あれは夜中の三時だつた。私はたった一人で通りを歩いていた。それより半年前に私は家出をしていた。（最初の妊娠に気づいたという意味で。）生れて初めてのことだつた。私はどうしたらいいんだろう。考へに考へた。誰に相談すればいいの

か。女達の言った言葉が耳もとで鳴っている。「何をぐずぐずしているの。さっさと片付ければそれで終りだろう？ い人を知っているんだ。すぐすむんだ。・・・」私は歩いて・・・歩き続けた。そしてふと気がつく。と街のお社（やしろ）の下にいたの。薔薇の天使様のお社の下に。思い切って私は言ったわ。（両手を気をつけの姿勢で、ピンと伸ばし、仮想のお社に向って、あたかも女と女、一対一で話しかけるかのよう。薔薇の天使に話しかける。）私はどうしたらいいの？ あなたは何でも御存知なのでしょう？ 私がどうしてこんなことになったのか、それだつて御存知の筈。じゃ、私、どうしたらいい？・・・答はなかった。（興奮して。）さあ、答えて頂戴。早く！ そう、分つた。黙っていればいるほど、みんなはあなたを信じてるって訳ね？ 駄目！ 私は今訊いているの！（命令口調で。）答えるの！ あなたは！（間。霊から出て来た声を真似て。）「子供は子供。授かりものですよ。」・・・私は石になった。そこに立ちつくした。（仮想の社を見上げて。）もしあの時、ひょっとして後ろを振り向いたら、私はその言葉を言った人を見つけたかもしれない。開いた窓から・・・道の向こうに・・・曲がり角に・・・でも私は自分なりに言い聞かせた。薔薇の天使様の声でなくつたっていい。丁度その時、丁度ピツタリあの時に、その声が聞こえたのは何故？ このあたりの人は誰も、私の今の悩みを知ってはいない。・・・じゃ、やっぱり薔薇の天使様の声じゃない。私は天使様のところへ来て、申し上げて、天使様が答えて下さったんだ。誰かの人間の口を借りて。そう、「さっさと片づければ、それで終りだろう」って言われた声だつて、やはり天

使様の声。あの言葉で私を試されたのだわ。私は今日、今でもまだ分らない。あの時「そう、その通り」と、首をこっくりしたのは（自分で頷く。「そう、分つたわね」と言うように。）この私だつたのか、薔薇の天使様だつたのか。子供は子供、授かりもの。私はその時誓いを立てた。（ドメニコに、猛烈な勢いで。）だからなのよ、あれからあなたにつき纏（まと）つたのは。あの子達のためなの。あなたに、そして、あなたの酷いやり口に我慢してきたのは。私と結婚したいと言つた若い男のことを覚えてるわね？ あなたと私とはもう、その五年前から一緒だつた。あなたはちゃんと自分の家に正式な妻がいた。私はサン・ピユティートのアパート。最初に私にあてがつてくれた家がそれ。私のいたあの宿から、あなたがここに入れてくれるまで、五年かかつたわ。私に結婚を申し込んだあの可哀相な男。拜むようにして私に頼んだわ。でも、あなたはやつかんで、やつかんで、それは大変。今でもあなたの声が聞こえる。・・・僕はもう結婚しているんだ。・・・君とは結婚出来ないんだ。ああ、君とあいつが結婚したら、僕は・・・そして泣きだした。私はその真反対。泣いてなんかいられるか！ 私は自分に言い聞かせた。そうなの。そういうことになっているの。ダウンミはあれでも私が好き。あれがあの人好きっていうこと。どうやっても私とは結婚出来ない。だって、妻の座はもう塞がっているんだから。・・・それで二人はサン・ピユティートのアパートに住んだ。そして二年たつて、あなたの奥さんは亡くなつたわ。でも私は考えた。ダウンミはまだ若い。たつた一人の女に自分を縛りつけないんだわ、まだ。きつとそのうち落ちて着

いて、正気に戻るわ。必ず。どれだけ私があの人のために働いたか分る筈。覚えてるの？ あなた。私はあの頃、よく言ったわ。「ドウンミ、ほら、向かいのあの娘、結婚したのよ。聞いた？」・・・でも、あなたはただ笑うだけ。あの嘲るような厭な笑い。鼻屑にしていた女の家の階段を登りながら、あなたとあなたのお仲間達が笑うあの笑い。淫売宿のあの階段の途中でやるあの嘲り。私は決して忘れない。売春宿でやるあの笑いは、誰がやっても、いつでも同じ。あの笑いをやっているあなたは、ああ、殺してやりたい！（ぐつと我慢して。）私は待った。私は二十五年間待った。今はあなたは五十二歳。あなたは年寄りなの。そう、もうあなたは年寄り。それなのにまだ、若い雄鶏（おんどり）のような気分にいる！ スカートを見るとすぐに追い掛けて、馬鹿な真似をして、口紅を塗りたくったハンカチを家に持って帰る。・・・淫売をこの家に連れて来る。（脅すように。）いいわね？ 今はもう私はあなたの妻なの。あの女をこの家に入れるような真似をしたら、あなたも、あの女も、二人とも追い出してやる。よくその頭に入れておくのね。あなたと私は結婚したんです。神様が正式に私達を結ばせたの。これは私の家なんですからね！

（玄関のベルが鳴る。アルフレードが開けに立つ。）
ドメニコ お前の家だと？（笑う。皮肉をこめた笑い。）
全く呆れたもんだ。
フィルメーナ お笑いなさい、勝手に。あなたが笑うのを聞くのは気分がいいわ。私の話が終った時、その笑いがどうなるか、見ものですからね。

（アルフレード、戻って来る。他の三人を困ったように見る。言い難いことを言わねばならないという顔。）

ドメニコ（乱暴に。アルフレードに。）何だ。何だったのだ。

アルフレード レストランからで、その・・・夕食を持って来たんです。

ドメニコ 分った、分った。食べればいいんだらう？ 食べれば。

アルフレード（自分の過失ではないという含みで。）そんな、ドン・ドウンミ・・・（玄関に怒鳴る。）おい、入れ・・・

（近所のレストランからのウェイター二人、蓋のついた皿、物を入れた籠、を持って登場。）

ウェイター（ペコペコ頭を下げ、媚び諂（へつら）う調子。）夕食でございます、旦那様。（ウェイター二人。）そこに置け。（籠と皿をウェイターが指差した場所に、二人で置く。）鶏は一羽なんですがね、旦那様。それが大きいやつで、四人で食べても大丈夫なほど。それから、御注文戴いた品は全部、それは本当に一級品でございます・・・（並べたり、いろいろ準備に取り掛かろうとする。）

ドメニコ（動作で二人の準備を止めさせる。）おい、聞くんだ。俺の言うことを聞け。いいか、もういい。出て行け！ 今すぐ出て行くんだ！

ウェイターへえ？（籠からプディングを取り出して、テーブルに置く。）あの御婦人の好物でして、これが・・・（壘を出して。）そして、ワインと・・・（ウェイターの言

葉に、誰も何も言わない。ウエイター、周囲の雰囲気全く気づかず、お喋りを続ける。次の台詞は諂うように。()それから・・・お忘れではありませんね？

ドメニコ 忘れる？ 何をだ。

ウエイター この夕食を御注文にいらした時のお言葉です。ね？ 私はお訊ねしました。そろそろ、お捨てになるうと思っただけじゃありませんでしようか、と。旦那様は、今夜家に来るんだ。その時にな、お前にいい話があるかどうか、教えてやる。今夜はな、俺が待ち望んでいることが起きるかもしれないんだ。そのいい話が起きたら、俺は背広を新調する。古いやつはお前にくれてやるさ。と、まあ、こんな具合に。(全員、厭な沈黙でこれを聞いている。間。ウエイター、だんだん心配になってきて。()じゃあ、いい話はなかった訳で？

ドメニコ(癡猛に。()出て行け！ すぐにだ！

ウエイター(ドメニコの剣幕に驚いて。()はいはい、分りました。行きます、行きますよ。(ドメニコを見て悲しそうに。()行こう、カルル。旦那様には、いい話がなかったよ。うだからな、どうやら。俺もついてないよ。(溜息。()お休みなさい、みなさん。(右手から退場。ウエイター二も、その後から退場。()

フィルメーナ(間の後。皮肉に、ドメニコに。()食べたらいいでしょ。ほら、食べなさいよ。食欲がなくなつたの？

ドメニコ(気まづい。怒って。()その気になつたら食べる。そのうちにな。

フィルメーナ(前に話に出てきた女のことを当てるすって。()

そうね、そのうちあのお待ち兼ねの女が現れるでしょうから。その時ね、食事は。

(ディアーナ、中央扉から登場。美人。二十二歳。或は、実際の年は二十七で、二十二歳に見せているのかもしれない。わざと拵えた上品さ。スノップ。人を上から見下すような態度あり。部屋に入つて来ながら、自分の優越を示すために、特定の誰にもなく話す。フィルメーナがいることに気づいていない。小さな医療用の鞆と薬を持っていて、それをテーブルの上になげやりに置く。椅子から白い看護婦用の上つ張りを摘(つま)み、それを着る。()

ディアーナ 本当に、あの薬局の込み方つたら！(命令するような口調で。()ロザリア、私にお風呂の用意をね。()

(テーブルの上の薔薇に気づいて。()ああ・・・赤い薔薇！
有難う、ドメニコ。何ていい香り。私、少しお腹がすいて12

いるわ。()テーブルから薬壇を摘んで。()カンフルとアドレナリンはなんとか手に入れたんだけど、酸素は薬局ではきらしていたわ。(ドメニコ、床に釘づけになつたように動かない。フィルメーナ、瞬(まばた)き一つしない。じっと待っている。ロザリアとアルフレードは、これから始まる場面を楽しみにしている様子。ディアーナ、観客に向つて坐り、煙草に火をつける。()私、ちょっと心に浮んだことがあるんだけど・・・駄目・・・こういふことは言つてはいけないの。

でも・・・もし、あの人今夜死んだら、明日一番で私、出て行くわ。知りあいの女の子が車に乗つけてくれるって言ったの。私、ここにいるも邪魔なだけなもの。ほら、ボローニヤではいろいろ私、やっておくことがあるでしょう？ 手筈

を整えたり・・・ね？ 十日したら帰って来るわ。あなたに会いに。あの人、どうなの？ まだ御陀仏じゃないの？ 神父様は呼んだ？

フィルメーナ（もう我慢が出来ず、ゆっくりとディアーナの方に近づく。計算された、慇懃な言い方で。）神父様はちゃんと呼びにやりましたよ・・・（ディアーナ、驚く。二、三歩後ずさりする。）そして、私の臨終の姿を御覧になって・・・（猛烈に。）脱ぐんです、それを！

ディアーナ（うろたえて。）何のこと？

フィルメーナ（その上つ張りを脱ぐんです！（辛抱強く。）さ、早く脱いで。

（ディアーナ、危険を感じて、上つ張りを脱ぐ。）

フィルメーナ（ディアーナが脱ぐのを監視して。）椅子の上置いて。そう、椅子の上です。

（ディアーナ、言われた通りにする。）

フィルメーナ（再び計算された、慇懃な言い方で。）それで、神父様はいらっしゃいました。私の状態がひどく悪いのを御覧になって、ドン・ドメニコ・ソリアーノに忠告をお与えになったのです。私との結びつきを・・・そう、ドン・ドメニコと私の、二人の結びつきを・・・最終的なものにするように、と。（ディアーナ、何をすべきか、手持ちぶさた。テーブルの真ん中に活ける薔薇を一本取って、匂いを嗅ぐ。フィルメーナ、鋭い目付きでそれを見て。）元に戻しなさい！

（ディアーナ、軍隊の命令を聞いたかのよつに、花瓶に戻す。）

フィルメーナ（元の慇懃な調子に戻って。）あなたにお話

するまでもないでしょうが、ドン・ドメニコは、神父様のその御提案をまことに尤もな話だと思いました。この人はきつと心の中でこう言ったのでしよう。うん、なるほどな。この可哀相な女は、俺のところにもう二十五年もいたんだ・・・それに、いろいろ、いろいろ・・・これ以上細かい話をして、あなたを退屈させてはいけないわ。それにどうせこんなこと、あなたには何の関係もないことですしね。神父様は、私のベッドの傍に來られて、ドメニコと私はカトリック教会の仲立ち、そして祝福を受けて、正式に結婚したのです。（間。）その結婚の儀式が病を癒す力、それに健康を与える力、を持っていたのでしょうか。「この二人を夫と妻、と宣言する」という言葉を聞くと、私はいつぺんに力が蘇ってきました。私はベッドから跳ね起きて、死はどこかあなたに飛び去って行ったのです。つまり、こうなればもう、看護婦なんていらないうつていうこと。死にかけた患者、病人は、もういないんですからね。看護婦がいらないだけじゃない。厭らしい、汚らしい、いちやいちゃもいらぬの。（こう言いながら、右手の人差指でディアーナの頬つぺたを弾く。ディアーナは弾かれる度に「厭！」と言うように頭を振る。）厭らしいこと、人が死にかけているのをいいことに、（指で弾くのを続ける。）その女の目の前で、いちやいちゃ、いちやいちゃ・・・そんなことはどこか他へ行行ってやるんだ！（ディアーナ、「一体これは何？」という表情で、ニヤニヤ笑いをしている。）出て行け！ お前なんかいらぬんだ、ここでは！

ディアーナ（相変わらず顔にニヤニヤ笑いを浮べて、入口の扉に進む。）そう仰るなら、仰せの通り・・・

フィルメーナ よくお聞き。本当にお前さんに相応しい、ちゃんとした仕事につきたいのならね、私が昔いた店で働くことね。

ディアーナ 店って、どこです？

フィルメーナ(ドメニコを指差して。)あの人に訊くのね。教えてくれるね。よく通ったもの、そういう店に、あの人は。名譽ある、立派なお客だった。だったんじゃない！今でもそうなのよ！だからお前もさっさとそこに行くことね！

ディアーナ(急に不安になって。)お勧め、有難う！(右手奥の扉へ後ずさりする。)

フィルメーナ どう致しまして！

ディアーナ お休みなさい！(退場。)

ドメニコ(この時まで、何か物思いに耽つて、この場の状況とは関係のない、あらぬことを考えていた様子だったが、ここでフィルメーナの方を向き。)それがあの女性に対するお前の言葉なのか？

フィルメーナ あれで充分。まだ勿体ないぐらい。(「厭な奴」という仕種。)

ドメニコ お前は毒虫のような奴だ。お前が現れたら、誰もが用心しなきゃならん。お前が言う一言一言は、全部証拠として書きとめて、註をつけて、意味をよく吟味しなきゃいかん。このことは肝に銘じて、決して間違いをしないようにせねばな。お前は毒虫のような奴なんだ。お前が触るものは全部壊れる。さっきお前は俺に何かを言った。それを今考えていたんだ。さっきお前は言ったな。「金ですって？金なんか自分で好きなようにすればいいの。私が欲しいのは違う

もの。あなたは私にそれをくれるの。」(間。)

確かに金である筈がない。もうとっくにこつちから、ふんだくられるだけふんだくっているんだからな。(叫ぶ。狂ったように。)

他に何が欲しいというんだ！ 狙いは何なのだ！ 答えろ！

フィルメーナ(静かに。)あなた、この歌を知っているわね？ ドウンミ。「教えて上げよう、小鳥ちゃん・・・お前は何にも知らないの」

ロザーリア(空中を見上げて。悲しそうに。)

ああ、とうとう・・・

ドメニコ(用心深く。疑いと怖れの氣持。)

何だ。それはどういう意味だ。

フィルメーナ あなたはこの歌の小鳥ちゃんなの。

ドメニコ 謎々など止める！ 俺をこれ以上怒らせるな。

フィルメーナ(誠実に。)

子供は授かりもの。

ドメニコ それがどうした。何の意味だ、それは。

フィルメーナ あの子供達に、自分達の母親が誰かを教えてやらなければ。私があの子達のためにしてやったことを全部話してやります。あの子達は私のことを愛さなければならぬ。(熱を込めて。)

あの子達が役場に行つて、出生証明書等、書類を請求する時、恥をかいてはいけないの！ 私生児の扱いなど、決してさせない！

そして家庭が必要なの。あの子達にも、寛(くつろ)いだり、鬱憤(うつぶん)を晴らしたり、困つた時には相談が出来、忠告を受けられる、家庭が必要なの。(間。)

あの子達には私の名前を名乗つて貰います。

ドメニコ お前の名前？ 何だ、お前の名前は。

フィルメーナ 私の名前？ 決っているでしょう？ 結婚したんですからね。私の名前はソリアーノ！

ドメニコ（勢いこんで。）やっぱりだ！ 俺には分っていた。その言葉がお前の口から出るのを待っていたんだ。その罰あたりのお前の口から。この事だけでも、お前をこの家から追い出すに充分な理由なんだ。お前は毒蛇だ。その牙にかかって死んでたまるか。お払い箱にするのは当り前だろう。全く、どこの馬の骨とも知れない人間を、この家に入れて、おまけに私の名前をつける？ 呆れた話だ。結局のところ、そいつらが何の子供か正体は分っているじゃないか、インバ・

フィルメーナ 何の子供？ ええっ？ 何の？

ドメニコ お前のだ。とにかくお前の子供だ。誰の子供かと訊かれれば、結局、正直なところ、お前の子供じゃないか。何度訊かれたって答は同じだ。お前以外の誰の子供だと言えないんだ。俺には答えられないぞ。俺は知らないんだからな。それから、言わして貰えば、お前にだつて誰か分つちやいないんだ。とにかくお前の子供だ。そいつらに対して良心の呵責（かしゃく）があつたんだ。それがこの家に連れて来ることですっかり重荷もなくなつた。何か丸く収まる、そう思つたんだ。馬鹿を言つな！ 冗談じゃない。連中に一歩でも踏み入れさせるものか！（穏やかに。）それは誓うぞ。俺の父親の墓にかけても！

フィルメーナ（誓いの途中で遮つて。）誓わないで、ドウソニ！ 何年も私が魂の抜け殻みたになつたのは、私が昔やつた誓いのせい・・・あなたも誓いなんかしては駄目。夜

も眠れなくなる。私の足元にひれ伏さなきゃならなくなる・・・ドメニコ（フィルメーナの言葉にハツとなり、一瞬呆然とする。しかしまた、怒りで我を忘れて。）まだ何か企（たくら）んでいるんだな。この魔法使いめ！ なに、怖がったりするものか。お前など、なにが怖い！ 怖いことなどあるものか！

フィルメーナ（挑むように。）そう。怖くないの？

ドメニコ うるさい！ 黙れ！（アルフレードに。パジャマの上衣を脱いで。）俺の上衣を持って来い。（アルフレード、黙つて書齋に行く。）明日お前はここを出て行くんだ。俺は弁護士のところに行つてこの件を調べさせる。証人はちゃんといるんだからな。法律手続上で、万一お前の方に分があるようだったら、その時はお前を殺してやる。いいか、殺してやるぞ、フィルメー！ エーイ、お前をふん縛つて、吊るしてやつたらどんなに胸がすくか・・・

フィルメーナ（皮肉に。）吊るすの？ どこに？

ドメニコ お前を最初に見つけた場所だ。お前のおよつて来たる場所にだ。（今やはつきりと、相手への攻撃の態度を明らかにしている。アルフレード、主人の上衣を持って来る。ドメニコ、ひつたくるようにそれを取り、着る。）いいか、アルフレード、お前は明日、弁護士のところへ行くんだ。（アルフレード、頷く。）それからフィルメ、その後、俺達の話だ。

フィルメーナ ええ、話しましょう。

ドメニコ 俺が何者か、目にももの見せてやる！（左手の扉の方に行き始める。）

フィルメーナ（テーブルを指さして。）ロザリー、何か食べましよう。きつとお前もお腹がすいている筈ね。（観客を正面に見る方向にテーブルにつく。）

ドメニコ 幸運のあらんことをお前に祈るよ、フィルメ。

フィルメーナ（歌つ。）「教えて上げよう、小鳥ちゃん・・・お前は何にも知らないの」

ドメニコ（フィルメーナが歌つのを聞き、唸り、次に笑う。フィルメーナを侮辱するように、傷つけるように。）この笑いをよく覚えておくんだな、フィルメーナ・マルトゥラーノ。（退場。後ろについて、アルフレードも退場。）

（幕）

第二幕

（次の日。同じ部屋。椅子（複数）は、テーブルの上、或はドメニコの書斎、或はテラスに移動してある。ルチーアが床を磨くためである。敷物がテーブルの下に敷いてあるのだが、これも畳まれている。よい天気。ルチーアは家事万端を受け持っている女中。明るく健康な女。二十三ぐらい。ほとんど掃除は終つて、雑巾をバケツの上で絞っているところ。それから掃除用具をテラスに収めに行く。）

アルフレード（見るからに疲れている。そして眠い。ルチーアが敷物を広げている時、中央扉から登場。）お早う、ルチ。

ルチーア（アルフレードが部屋の中に進むのを止めて。大きな足の裏で、部屋を歩きまわるのは止めて。アルフレード

じゃ、手で歩くのか？

ルチーア 今丁度掃除を終えたところなんだから・・・（まだ濡れている床を指さして。）大きな足でペタペタ、ペタペタ歩き廻つて。駄目じゃない。

アルフレード 言葉に気をつける、ルチ。大きな足とは何だ。私はくたびれきつているんだ。（テーブルの傍に坐る。）くたびれきつているというのがどんなものか、お前分るか？ タペー晩中、旦那様のお付き合ひをしたんだ。一晩中、海岸のベンチにじつと坐つていなさるのを、寝ずの番をしたんだ。寒かつたのなんの、全体、何故私がこんな仕事をしなきゃならないんだ！ いやいや、私は不平を言っているんじゃない。とんでもない。旦那様はいつも公平無比。百歳までも生き長らえて下さいますように。それも静かな平和な人生を。私ももう若くはない。六十だ。吹き曝（さら）しの海岸で一晩過すには年を取り過ぎている。ルチ、いい子だ。私にコーヒーを一杯くれないか。

ルチーア（アルフレードが話している間に、椅子を全部元に戻す。アルフレードの話はよく聞いていない。）コーヒーはないよ。

アルフレード（がっかりする。）ないのか、コーヒーは。ルチーア ありません。昨日の残りのコーヒーがあるだけ。余分が一杯分あつたけど、ドンナ・ロザリーアがいらないといて、ドンナ・フィルメーナに譲つて上げて。あと、最後の一杯は旦那様のためにとってある。帰つて来られた時のために。

アルフレード（まさかという気持。）帰つて来られた時のため？

ルチーア そうよ。今日のコーヒーは淹れてないの。ドンナ・ロザーリアが淹れなかったんだから。

アルフレード お前はコーヒーは淹れられないのか。

ルチーア 私、コーヒーは淹れられない。誰も淹れ方を教えてくれないんだから。

アルフレード (なつてないな、という気持。) 何だ、コーヒーも淹れられないのか。今日、ロザーリアはどうして淹れなかった。

ルチーア 今朝早く出かけたわ。ドンナ・フィルメーナから頼まれて。至急の手紙を三通届けに行つたの。

アルフレード (聞き耳を立てる。) 手紙を三通? ドンナ・フィルメーナに頼まれて?

ルチーア そうよ。三通。一・・・二・・・三。

アルフレード (疲れた身体の話に戻つて。) やっぱりコーヒーが欲しいなあ。そうだルーチ、いい考えがある。旦那様のコーヒーを半分私に分けるんだ。そしてあとの半分を水で薄めればいい。

ルチーア もし見つかったら?

アルフレード とてもお帰りになるとは思えない。とにかく暫くはな。ヴィア・カラッチオー口の真ん中にあるお屋敷で過すつもりでいらつしやるようだ。それに、帰つて来られようと、来られまいと、旦那様より私の方がコーヒーがいるんだ。私の方が年よりなんだからな。全く、何のつもりなんだ、一晩中海岸の吹き曝しの中で過すなんて。

ルチーア 分りました。暖めて持つて来ます。(左手の扉の方に向う。その時右手から入つて来ようとするロザーリア

に気づき、立ち止まり、アルフレードに警告する。ドンナ・ロザーリアよ・・・(アルフレード、黙つてルチーアの方を見る。) どうしましょう、コーヒーは。やっぱり持つて来ますか?

アルフレード 当たり前だ! ロザーリアが帰つたのなら、ドン・ドメニコには新しくコーヒーを淹れさせればいいんだ。(ルチーア退場。ロザーリア登場。アルフレードに気づく。しかし、気づいていないようなふりをする。フィルメーナのためにやつて来た使いがいかに大事なものであつたを考え、まだそのことで頭が一杯。フィルメーナの寢室の方へ進む。アルフレード、自分を無視しているその態度を許さず、ロザーリアの後姿に皮肉な声で呼び掛ける。) お前さん、舌を無くしたのかね? ロザーリア。

ロザーリア (関心なく。) あら、見えなかつたわ。

アルフレード 見えなかつた? すると私は透明人間というわけか。どこへ行つていたんだ。

ロザーリア ミサよ。

アルフレード (疑わしそつに。) ミサに? するとドンナ・フィルメーナから預かつた手紙は配らなかつたのか?

ロザーリア (図星をつかれて、慌てないよう、ぐつと自分を抑えて。) そんなによく知っているのなら、何故訊いたりするの。

アルフレード (無関心を装つて。) まあ、格好の暇つぶしになるからな。どこに手紙を配つたんだ。

ロザーリア (「あなたは秘密を守られない男でしょう?」と言わんばかりに。) お喋りが酷いのよ、あなたは。いつも

ペラペラと噂話。それに、人のことを探ってばかりいる。

アルフレード 人のことを探る？ この私が？ 探る？
いつ私がお前さんのことを探ったりした。

ロザーリア 私？ 私のことなんか、誰が探るものですか。
私の生涯なんて、開けっ広げそのもの。（以下単調に、まるで暗記していることを繰り返すかのように。）私は一八七〇年の生れ。年を知りたかったら計算して御覧なさい。両親は貧しかったけれど、きちんとした暮らしをしていた。母、ソフィーア・トロンベッタは洗濯女。父、プロコーピオ・ソリメーネは鍛冶屋。私、ロザーリア・ソリメーネはヴィンチェンツォ・バリオーレと結婚。ヴィンチェンツォは帽子職人。内職に傘直しもやっていた。結婚式は一八八七年十一月二日。厳かに、とどこおりなく執り行われる。夫婦には三人の子供が恵まれる。実はこの三人は三つ子。産婆が、このお目出度い知らせを夫に知らせに仕事場に駆け付けると、夫は流しに顔を突っ込んで・・・

アルフレード ……顔を洗っていた・・・

ロザーリア（最後の台詞を繰り返す。アルフレードに、途中で口を挟むのは悪い趣味であることを教えるように。）流しに顔を突っ込んで、死んでいた。どうやら、急な卒中の発作のため。こうして、まだ若い働きざかりの夫を、家族から奪われてしまい、両方の赤ん坊はたちまち孤児。私は・・・

アルフレード 両方はおかしい。三人だからな。

ロザーリア（これを無視して。）・・・この腕一本で三人の子供を育てなければならぬ身となる。私はヴィコ・サン・リボーリオへ移り、蠅叩きを売って生計を立てる。蠅叩きの

他に、死人を祭る蠟燭、お祭りの時の紙の帽子を売る。蠅叩きは自分で拵えた。その僅かな稼ぎで子供を育てた。ヴィコ・サン・リボーリオに移って、暫くして私は、ドンナ・フィルメーナを知るようになった。まだ小さい女の子で、私の息子達とよく遊んでいた。息子達は二十一になっても職がなく、一人はオーストラリアへ行き、あとの二人はアメリカに行った。それから三人とも音信不通。私は相変らず蠅叩きと蠟燭と紙の帽子を売って暮した。ドンナ・フィルメーナがドン・ドメニコの家に住むようになった時、ドンナ・フィルメーナは私も一緒に連れて来て下さった。このような暮らしが出来ているのも、みんなあの方のお陰。こうやって救って下さらなかったら、きっと今ごろは、どこかの教会の階段で、物乞いをしていたところだった。御来場、洵に有難うございました。これで映画はお仕舞い。

アルフレード（微笑んで。）次の映画の予告編はないのか？ さあ・・・さっきの三通の手紙はどこに持って行ったんだ？
ロザーリア 秘密の使いよ。そんなこと、明かすものですか。特にあんたみたいなお喋りにはね。

アルフレード（がっかりして。同時に急に意地悪く。）何て厭な女なんだ、お前さんは。厭味がその顔に現れている。全く厭な顔だ。そんな穢い顔の上じゃ、薪を割る気にもならない。

ロザーリア それで結構。あんたを旦那様に持ちたいなどと、ちつとも思っていないんだから。

アルフレード（まるで悪口を言ったのを忘れていているかのよう。いつもの親しい調子で。）上衣の釦が取れちゃってね。

つけてくれないかな。

ロザリア（寢室の方へ歩き始めて。）明日。もし時間があれば。

アルフレード それにズボンに穴が開いちゃってね。つぎをあてて欲しいんだ。

ロザリア あてるつぎをまづ買って来るのね。そうしたらやって上げるわ。（嘲るように。）じゃ、私はこれで・・・

（退場。）

（ルチア、左手からコップに半分ついでコーヒーを持って登場。玄関のベルが鳴る。アルフレードの方向に歩いていだが、ベルを聞いて玄関の方へ引き返し、扉から退場。）

ドメニコ（間の後、登場。蒼い顔。疲れている。その後ろにルチア登場。まだカップを持っている。ドメニコ、そのカップに気づく。）それはコーヒーか？

ルチア（「どつしよつもないわ」という表情でアルフレードを見る。アルフレードは、この時までに立上っている。）はい、そうです。

ドメニコ こつちによこせ。（ルチア、ドメニコにカップを渡す。ドメニコ、ゴクゴクと飲む。）うん、欲しかったところだ、コーヒーが。

アルフレード（不満そうに。）私もです。

ドメニコ（ルチアに。）じゃあ、こいつにも持って来てやれ。（テーブルの椅子に坐る。両手で頬杖をついて、考えこむ様子。）

（ルチア、アルフレードに、仕種で、これから持って来るコーヒーは水で薄めたものであると、知らせようとする。）

アルフレード（苛々と。）何でもいい。持って来てくれ。

（ルチア、左手から退場。）

ドメニコ 何だ、あれは。

アルフレード（無理に笑いを浮べて。）コーヒーは冷たい、と言うんです。だから、それでもいいと。

ドメニコ 暖めればいいじゃないか。（考えていたことに戻って。）弁護士には会って来たのか。

アルフレード はい。

ドメニコ いつ来る。

アルフレード 時間が出来次第です。少なくとも今日中には。

（ルチア、コーヒーカップを持って登場。ニヤニヤ笑いながらアルフレードに渡す。振り向いて、ゲラゲラと笑って退場。アルフレード、諦めの表情。酷いものを飲まねばならないと、覚悟を決める。）

ドメニコ（自分の考えを追っていたが、その最後の部分を口に出して言う。）・・・フム、しかし、もしまさくなったらどうしたらいいんだ。

アルフレード（諦めて。ドメニコの言葉がてつきりコーヒーのことだと思い。）ガタガタ文句を言っても始まりません。さつさと出かけて、角のコーヒー屋で口直しをしますよ。

ドメニコ コーヒー屋で口直し？ 何を馬鹿なことを言ってる。俺は弁護士の話をしているんだ。こつちが勝つ見込みがなくて、あいつとの結婚を破棄出来なかつたらどうしたらいいだろうと・・・事態は実に・・・

アルフレード（一口飲んで。あまりの不味さに顔を曇めて。）

不味い！（傍の家具の上にカップを置く。）

ドメニコ まずい。たしかにまずい。しかし、お前にどうして分る。

アルフレード（コーヒーの味には通だと言わんばかりに。）
どうして分ると言われても・・・吐き気がしますよ、これは。

ドメニコ よく言った。吐き気がする。（間）まあいい。
あいつにはどうせ出せっこないんだ・・・（法廷には・・・）

アルフレード そうなんですよ、ドン・ダウンミ。あれにはどうせ出せっこないんです・・・（コーヒーはルチアには・・・）

ドメニコ まあ、心配するな。こっちは最後には法に訴えるという手が残されている。最高裁にでも出してやる。

アルフレード（驚いて。）最高裁？ そんな大袈裟な。たかがコーヒー一杯で・・・

ドメニコ 何がコーヒーだ！ 自分の話をしているんだぞ、俺は！

アルフレード（奇妙な顔。よく意味が分らない。）はあ・・・（誤解に気づき、微笑む。）ああ、そうですか・・・（笑う。）なるほど・・・（ドメニコの機嫌を損ねることを怖れて、すぐ真面目な顔になり、主人の苦境を分かち合おうという気持ちで。）そうですね・・・いや、やれやれです。

ドメニコ（その顔を見て、すぐ相手の心の動きを見抜き、アルフレードとこの問題を話すのは諦めて。）こんな重要な話をお前にしようとしたのが、どだい俺の間違いだったな・・・

そうだ、お前と出来る話というのは、どんなものか？ 過去だな、多分。現在のことは駄目だ。（改めてアルフレードを

見る。今初めて会ったかのような顔。優しい声で。）ああ、

アルフレード、アルフレード。お前はどうなってしまったんだ？ 何ていう姿になってしまったんだ。顔は皺だらけ、頭は白くなって。すっかり老け込んでしまったじゃないか。

アルフレード（ドメニコの言ったことに逆らわない。強く賛意を表しておいた方が得策だと判断して。）全くです！

ドメニコ（自分も同様に年をとっているのだと気づき、自分もすっかり変わったのだと自覚して。）時は過ぎて行く。誰しも一様にな。俺も例外じゃない。（思い出して。）（思い出しながら。）お前、ドン・ミニ・ソリアーノを覚えているか？

アルフレード（他のことを考えていて、聞いていない。しかし興味があるようなふりをして。）いえ、覚えてはいないと思います。亡くなった方ですか？

ドメニコ（苦々しげに。）当たり前だ。死んでいる。ドン・ミニ・ソリアーノは死んだのだ。

アルフレード（馬鹿なことを言ったことに気づき。）ああ、あの方のことをお話しで・・・（失敗を後悔して。）糞っ、馬鹿なことを！

ドメニコ（自分がかつて若かった頃を思い出し、少し元気が出て。）そうだ、あの頃は俺も若かった。小さな黒い口髭、背骨をピンと立てて。夜昼なしに遊んだものだ。徹夜など平

ちやらだった。あの俺はもう死んだのだ。

アルフレード（あくび。）そうでしたねえ！

ドメニコ 丘の上にいたあの女、覚えてるか？ 好かつたなあ、何て凄い女だったんだ、あれは。それに、獣医の連

れ合い。・・・ああ？ 好かったじゃないか。

アルフレード ええ、思い出しますねえ。そうそう、獣医の連れ合いには義理の妹がいて、私はそっちに首ったけ・・・でも、どういふ訳か、うまくいきませんでしたね、彼女とは。

ドメニコ 街に出ると、俺はもっともてたぞ。公園を馬で散歩して・・・

アルフレード 旦那様の乗馬姿は本当に天下一品・・・

ドメニコ うん、そうだった。俺の好きな馬は、栗毛か韋毛・・・絹の帽子に銀の拍車・・・一番の名馬を持っていたなあ、あの頃は。「銀の瞳」を覚えていたか？

アルフレード 「銀の瞳」！ 韋毛でしたね、あれは。(うつとりと思い出して。) 何ていう名馬！ あの尻！ 満月そのもの！ あの尻を真直ぐ見ると、天国の扉を見るようでした。私はあれに惚れていましたよ。あれを売ってしまった時、私は失恋した気分でした。

ドメニコ (アルフレードの思い出にブレーキをかけて。) パリでの・・・ロンドンでの・・・競馬！ 俺は世界のトップをきっていた。何でも出来た。やりたいことは何でも。(急に思い出して。) 俺に命令する奴など誰もいなかった。

(山でも動かせたんだ。海を干上らせることも出来たんだ。・・・自分の運命は自分で決めていたんだ！) ところがどうだ、今日のこの俺のさま！ 事破れて、何もかも終だ。よし、このままで終にするものか。昔の俺が生きていることを見せてやる。(決意をもって。) 闘うんだ！ ドメニコ・ソリアーノに敗北はないぞ！ (静かに、アルフレードに。) 俺がいない間、ここではどんな具合だったんだ。

アルフレード (言い渋りながら。) どうも掴めませんで。

誰も話してくれないものですから・・・旦那様も御存知の通り、私はドンナ・フィルメーナからは嫌われていまして・・・その・・・ルチーアが話してくれたことしか私は知りません。

ロザリーアが、ドンナ・フィルメーナから託された三通の手紙を届けに行った、と・・・

ドメニコ (自分の疑念が確かめられた様子。) 誰にだ。

(アルフレード、答えようとするが、フィルメーナが入って来るのを見てやめる。)

フィルメーナ (部屋着姿。少し髪が乱れている。ドメニコとアルフレードを完全に無視。フィルメーナの後ろにロザリーアがベッドシートをもって登場。フィルメーナ、大きな声で呼ぶ。) ルーチー！ (ロザリーアに。) 鍵を貸して。

ロザリーア (鍵を渡す。) はい。

フィルメーナ (鍵をポケットに入れて、ルチーアの来るのを待たしながら待つ。) まだかしら。ルーチー！

ルチーア (登場。ひどく心配そうな様子。) はい。何か・・・ (御用で・・・)

フィルメーナ (みなまで聞かず。)(このシートを持って (ロザリーア、シートを渡す。)(書齋の次の間にソファがあるわね？・・・あのソファをベッドにして。

ルチーア (驚いて。) はい、分りました。(出ようとする。)(フィルメーナ 待って、ルーチー。あなたの部屋も使うの。

(ルチーア、驚く。)(ほら、見て、シート。それに毛布が二組。あなたは台所の非常用のベッドに寝なさい。

ルチーア (ムツとして。) 私、持ち物がありますけど。そ

れも動かすんですか？

フィルメーナ 言ったでしょう？ 私、あなたの部屋が
要なの。

ルチーア（声を上げて。）じゃ、私の物はどこに置くん
です。

フィルメーナ 廊下にある戸棚に置けばいいでしょう。

ルチーア 分りました。（退場。）

フィルメーナ（ドメニコがそこにいるのに初めて気がつ
いたという顔で。）あら、あなた、そんなところに・・・

ドメニコ 俺はここに住んでいるんだぞ。（冷たく。）何
をどうするのか、俺に説明してくれる奴はいないのか。

フィルメーナ 勿論私が説明します。夫婦の間で秘密など
あつてはならないものですからね。もうあと二つベッドが必
要。それだけのことよ。

ドメニコ 何のためだ。

フィルメーナ 子供達用のです。最初は三つの予定でした
けど、一人は結婚して四人の子供もいますから、今まで通り
の所に住ませよう。

ドメニコ なるほど・・・もう俺達は孫までいるというこ
とか・・・（相手を怒らせるように。）それで、今までお前
が隠してきたその部族の、苗字は一体何というんだ。

フィルメーナ（自信たっぷり。）私の苗字。一時的です
けどね。暫くすればあなたの苗字になるのですから。

ドメニコ 俺の同意なしに、そんなことになるとは思えな
いかな。

フィルメーナ あなたの同意？ そんなの、そのうちです

もの。（退場。）

ロザリーア（ドメニコに、これ見よがしの服従の態度で。
）では、失礼します。（フィルメーナに従って、寝室に退場。）

ドメニコ（突然怒って。その後ろから怒鳴る。）そいつら
を追い出してやる！ いいか！ この家に一步も足を踏み入
れさせんぞ！

フィルメーナ（舞台裏で。皮肉をこめて。）さあ、ロザ
リー、扉を閉めて。

（ドメニコの顔の前で、扉が閉まる。）

ルチーア（奥の扉から。）ミス・ディアーナがいらっしや
いました。男の方と一緒にです。

ドメニコ（元気が出て。）通すんだ。すぐ。

ルチーア お入りになりたくない御様子です。私、お二人
にどうぞ、と言ったんですけど、旦那様の方に、出て来て戴
きたいと。ドンナ・フィルメーナに脅（おび）えていらっしや
います。

ドメニコ（怒って。ルチーアに。）俺がテロリストにでも
捕まっていると言っのか。心配はいらんと見え！ すぐには
いれ。俺はここにいると言っんだ！

（ルチーア退場。）

アルフレード あの女の人が、ドンナ・フィルメーナに見
つかつたら、何をされるか、私は安全を保障出来ません。

ドメニコ（隣の寝室に聞こえるように、大きな声で。）馬
鹿なことを言うな、アルフレ。この家の主人はこの俺だ。あ
いつなど（フィルメーナの寝室を指さす。）勅定に入らん！

ルチーア（奥の扉から登場。ドメニコに。）入りません、

とのことです。とても怖くて、と。

ドメニコ しかし、独りじゃないんだろう？ さつきお前はそう言った筈だが。

ルチーア はい。お友達の弁護士の方と一緒に。(ちよつと考えた後。) 弁護士の方も少し怖がつていらっしやるようです。

ドメニコ 何を言ってるんだ。俺を入れれば男が三人だぞ。

アルフレード 私のことはどうか数には入れないで。今朝のこの気分では、とても御期待にそえるような働きは出来ません。(決心を固めて。) 私はここでは不要の人物です。ちよつと顔を洗いに・・・台所の方へ・・・御用の時はお呼び下さい。(許可の言葉を待たず、奥の扉に退場。)

ルチーア どう致しましょう、旦那様、私は。

ドメニコ 俺に任せろ。(ルチーア、左手奥の扉から退場。

ドメニコ、右手奥の扉に退場。すぐディアーナとノチェツラを従えて登場。) 冗談にも、ああいうことは言つな。ここは俺の家なんだ。

ディアーナ(敷居のところを躊躇う。脅えて、後ろにいるノチェツラに縋るようにして。)(ご免なさい、ドメニコ。でも昨日のあの騒ぎ・・・私、もう怖くてあの人には顔を合わせられないわ。

ドメニコ(大丈夫だと論(さど)すように。)(ディアーナ、頼む。私が馬鹿みたいに見えるじゃないか。入るんだ。怖がるんじゃない。

ディアーナ 怖がつてはいないわ。全然よ。でも、余計ないざごきは避けた方がいいもの。

ドメニコ 見えるだろう？ 私がここにいるじゃないか。

ディアーナ タベだつて、あなたいたわ。

ドメニコ タベは違う。タベは不意打ちを食らつてアタフタしていたんだ。今日はそんなことはない。保証する。さあ、入つて、ミスター・ノチェツラ。楽にして下さい。

ディアーナ(用心深く前に進む。)(あの人、どい?)

ドメニコ 心配はいらん。さあ、坐つて。(椅子を三つ引きたす。三人がテーブルの周りに坐る。ノチェツラが真ん中、ドメニコ、その右、ディアーナ、ノチェツラの左。ディアーナ、寢室の扉を心配そうに見ている。)(さてと。それで?)

(ノチェツラは四十代。ひどく普通の男。きちんとした服装。ディアーナによつて嫌々ながら、このソリアーノの件に引張られて来たという様子。彼の取る態度には、この件に関する関心がまるでないことを示す何かがある。)

ノチェツラ 私は、ミス・ディアーナの近所のもので。同じ下宿に住んでいるんです。私達はそこで出会つたんです。

ディアーナ ミスター・ノチェツラは力になつて下さるわ。私にも、それから、あなたにも。

ノチェツラ(関り合いになりたくない。)(夕食の時間にお会いたんです。つまり私が偶々下宿に帰つて居る時に。客があるものですから帰りはいつも遅いんです。ですから普段はいつも私一人です・・・)

ディアーナ(やつとこのことで心配な気持を抑えているが、屢々ギクリとして寢室の扉を向く。いつ何時フィルムメーナが飛び出して来るか分らないため。)(ねえ、ドメニコ。私、今のそのあなたの席がいいわ。替わつていいかしら。

ドメニコ いいよ。

(二人、席を替わる。)

ディアーナ タベ、夕食をこの方と一緒しながら、あなたのことをお話したの、私。

ノチェッラ その通りです。二人とも大笑いで・・・

(ドメニコ、ディアーナをぐっと睨む。)

ディアーナ 違います。私、笑ったりしませんでしたわ、ちっとも。

(ノチェッラ、奇妙な顔をしてディアーナを見る。)

ドメニコ ディアーナにはここで看護婦の役を演じて貰った、確かに。

ディアーナ (苛々と。) 演じたんじゃないわ。私、看護婦よ。証明書を持っているわ。私、あなたに話さなかつたかしら。

ドメニコ (ちよつと驚く。) いや、聞いてない・・・

ディアーナ 取り立てて話すようなことじゃありませんもの。そう、私タベ、この方に話しました。何の共通点もない女と一緒になるなんて、あなたがどんなに厭がっているかっということを・・・

(玄関のベル、鳴る。)

ドメニコ (心配そうに。) あ、ちよつと書齋の方に移って戴いていいですか。誰か来たようだ。

(ルチーア、右手奥から登場。左手奥へ進む。)

ディアーナ (立上りながら。) ええ、その方がよさそうね。

(ノチェッラも立上る。)

ドメニコ (二人を書齋に導く。) どうぞお先に。

ノチェッラ 有難うございます。(最初に書齋に入る。)

ドメニコ (ディアーナに。) 何か分つたか?

ディアーナ (二人だけの内緒の話、という雰囲気。) 後でね、可愛い子ちゃん。少し顔色が悪いわよ、あなた。(ドメニコの頬を愛撫して、書齋に入る。その後からドメニコも退場。)

ルチーア (ウンベルトを部屋に入れながら。) どうぞ。

(ウンベルトは背の高い、がっちりした若い男。穏やかな趣味の服装。本好きの勉強家タイプ。物を聞き、話す時の態度に鋭さがあり、それが人を落ち着かせない気分させる。)

ウンベルト (登場。) 有難う。

ルチーア どうぞお坐り下さい。奥様はどのくらい時間がかかるか分りませんの。

ウンベルト ああ、有難う。

(ウンベルト、テラスに近い左手に坐る。ポケットから取り出した手帳に、何か書き留める。ルチーアは左手の扉に進む。しかし、玄関のベルを聞き、途中で戻る。右手の扉から退場。少しの間後、リッカルドを導き入れて登場。)

ルチーア どうぞ。

リッカルド (魅力のある男。派手な服装。入つて来るとまづ、腕時計を見る。) 早くして貰えないかな。僕は用があるんだ。(この時までルチーア、左手の扉に進んでいる。リッカルド、その姿を感じて眺めていて、引き留めようとする。)

ねえ君。君、いつ頃からこの仕事をしているの?

ルチーア 一年と半年ですわ。

リッカルド 君、綺麗だね。

ルチーア（嬉しがる。）（あら、有難う。

リックカルド 僕の店に時々は来てくれよ。

ルチーア あなた、店を持ってるの？

リックカルド ヴィア・チアアにあるんだ。七十四番地。

ビルの玄関の丁度入ったところさ。ワイシャツ、いいのを作ってるぜ。

ルチーア あらまあ、男のワイシャツなんか着たら、どんな風に見えるかしら。ほつといて頂戴。

リックカルド ワイシャツって言ったけど、シャツの仕事は男性用のものも女性用のものもやってるんだ。男のなら作るし、君みたいな綺麗な女性なら、そのシャツを脱がせる仕事をね。（こう言いながら、ルチーアの手を握る。）

ルチーア（もがいて、振りほどこうとする。）（ほつといて。ほつといてったらー！）（やっと振りほどいて。）（あんた、気違い？ 私を何だと思ってるの。奥様に言いつけてやるから。（ウンベルトが無表情にこちらを眺めているのを指さして。）ほら、あの人だっ見てている！

（玄関のベル、鳴る。）

リックカルド（ウンベルトを見てにやりと笑う。）（なあんだ・見えなかったな。二人だけだと思ったんだ。

ルチーア（怒った声で。）（私はちゃんとした女なの。分ったわね。

リックカルド（誘うように。）（ねえ、いいだろう？ 店に来てくれよ。な？

ルチーア（到頭折れて。）（七十四番地？

リックカルド）「待ってるぞ」「と一口調。（・・・ヴィア・

チアア。

ルチーア そうね・・・（右手の扉に進み、開く。そして承諾の言葉。）（いいわ。

リックカルド（部屋をあちこち歩く。ウンベルトが自分の方を見ているのに気づく。ルチーアとの今の行為を正当化する必要があると考えて。）（な？ 悪くないだろう？

ウンベルト 私には何の関係もないことですな。

リックカルド（ムツとして。）（何だあんたは。坊さんか何か。

（ウンベルト、答えず、また何か手帳に書き留める。）

ルチーア（ミケーレと共に登場。）（こっちよ、ミーケ。

（ミケーレ、水道屋の青いつなぎの服を着、道具箱を持っている。健康で、元気のよい若い男。複雑な感情のない、陽気な男。）

ミケーレ（帽子を脱ぐ。）（今度はどこが悪いんだ？ ルーチ。風呂がまた漏ってるなんて話はないよな。この間直したばかりなんだぜ。

ルチーア お風呂はいいのよ。

ミケーレ じゃ、どこが漏ってるんだ。

ルチーア どこも漏ってないのよ。ちょっと待ってて。奥様を呼んで来るわ。（左手から退場。）

ミケーレ（リックカルドに。）（やあ。（リックカルド、ちょっと頭を下げて、この挨拶に答える。）（店をほつたらかしにして出ちまったんだがなあ・・・（ポケットから半分吸った煙草を引っ張り出して。）（火ある？

リックカルド（横柄に。）（ないね。

ミケーレ じゃ、煙草は止めとくか。(問) あんた、俺の親戚か?

リツカルド 何ですか。公式の質問なんですか? それは。

ミケーレ ええっ? 「コウシキ」? 何だい、「コウシキ」ってのは。

リツカルド お前さん、お喋りが過ぎるって言うことさ。こっちは違うんだ。

ミケーレ 何だと? 偉くお高くとまってるんだな。一体自分を何だと思ってるんだ。

ウンベルト(口を入れる。)(この男は強姦魔だ。

リツカルド ええっ? 今何と言った。

ウンベルト 君はここに入りこんで来るや、断りもなく、ここが他人の家であることも構わず、女中にうるさく付き纏い始めた。それから私にも絡(から)んできた。そして今、この可哀相な男が現れるや、得たりと踏み潰そうとしている。

ミケーレ(怒って。ウンベルトに。)(俺が「可哀相な男」だと? それに、踏み潰す? 俺が踏み潰されるような男だと思ってるのか。(リツカルドに。)(フフン、ここは面白い人間に会える場所らしいな。

リツカルド どうやら本気で絡んで来る気だな。するとお行儀を教える必要がありそうだ。

ミケーレ(怒って。道具箱を置いて、ゆっくりとリツカルドに近づく。)(何を! よし、やってみる。俺にお行儀を教えてみるんだな。

リツカルド(ミケーレに近づいて。)(お前みたいな奴を怖

がる俺だと思ってるのか。

(ウンベルト、喧嘩が始まりそうだと感じ、止めに入るために二人に近づく。)

ミケーレ この野郎!(リツカルドに素早いパンチを浴びせる。リツカルド、ウンベルトがミケーレを抑えたため、そのパンチを危うく躲(かわ)すことが出来る。ウンベルトに。)(おい、お前。邪魔するな!

(ミケーレとリツカルド、殴り合う。ウンベルトも間に入って三つ巴。殴ったり、蹴ったり。しかし、決定的な打撃は入らない。三人、怒鳴りあう。)

フィルメーナ(左手から登場。恐ろしい勢いで怒鳴り、喧嘩を止める。)(止めなさい!(この時までには口ザリアも登場して、フィルメーナの丁度後ろに立っている。)(誰の家にいると思ってるの!

ウンベルト(殴られた鼻をさすりながら。)(二人を引き分けようとして・・・

リツカルド 僕もだ。

ミケーレ 俺もだ。

フィルメーナ じゃ、誰と誰が喧嘩をしていたの。

三人(声を揃えて。)(私じゃありません。(僕じゃないです。)(俺じゃない。)

フィルメーナ 恥を知りなさい。全く。フリーガンのような真似をして、殴り合うなんて。(問)それで、あんた達・・・(どう話を切り出していいかわからない。)(どうなの? 仕事は。

ミケーレ お陰様で。順調です。

フィルメーナ(ミケーレに。)子供達は元気？

ミケーレ 元気です。でも先週一人、熱を出したんです。母親の見ていない隙を狙って、葡萄を四ポンドも食べちゃったんです。可哀相に、腹がパンパンにはっちゃまって、まるで太鼓でさあ。まあ、四人も子供がいりゃ、誰か一人は何かやってますがね。幸いなことに連中はみんな肝油が好きで。一人が一粒飲むというと、他の三人も必ず自分にもくれと言う。それから怒鳴ったり叫んだり、一騒動あって、一人づつちゃんと一粒づつ貰ってやつと落ち着くんです。全く子供ってやつはこれですからね。

ウンベルト 奥さん、私は奥さんから連絡を買っても、何のことかさっぱり分りませんでした。それから、手紙の上の方にある住所を見てやつと、いつも夕方、新聞社に立ち寄る時、道でお会いする婦人なのだと気がついたので。それに一度、奥さんは足をひどく痛めて、お家までお送りしたことがあります。それで多分……

フィルメーナ ええ、そう。あの日は私、随分びっこをひいていたわ。

リツカルド(単刀直入に。)ぶつきら棒で悪いんですが、何の用でお呼びになったのか、教えて下さいませんか。

フィルメーナ(リツカルドに。)あなた、お店はどう？

リツカルド まあまあです。有難いことに、客は奥さんみたいな客ばかりじゃありませんからね。奥さんみたいな客ばかりじゃ、全くやって行けませんよ。一箇月でこっちは破産です。奥さんが来ると、鈍器で頭を殴られたみたいになっちゃいますからね。柵から、ありつただけの在庫を下ろさせ、こ

れは模様が駄目、あれは色が駄目、こっちはいいけど、買うならあつちね……お帰りになる頃にはもう店中竜巻にやられたような具合です。これじゃ元に戻すのに、店員のアルバイトを雇わなきゃならないって……

フィルメーナ(母親のように。)あら、これからは気をつけるわ。

リツカルド いや、いいんです。お客様は神様なんですから。でもとにかく、奥様がいらつしやると内心ビクビクものだったってことで。

フィルメーナ(楽しそうに。)いいですか。あんた達を呼びにやつたのは、非常に大切な話があるからです。ちよつとこつちへ来て。(左手の扉を指さす。)あそこの方が落ちて着いて話せますから。

ドメニコ(書斎から登場。その後ろからノチエツラ登場。)

ドメニコ、元気を取り戻した様子。機嫌よくきつぱりした態度。(これ以上ジタバタするのはよすんだな、フィルメ。自分から事をもつと悪くする必要はない。(ノチエツラに。)

あんたが来るずつと前から、私には分っていた。お日様の光よりもつと明らかだからな、こんな事は。(フィルメーナ、「何を言っているか」という顔でドメニコを見る。)ああ、こちら、ミスター・ノチエツラ。弁護士さんだ。この人が法律の何たるかを教えてくれる。(ウンベルト、リツカルド、

ミケーレの三人に。)お前さん達には悪いが、どうやらドンナ・フィルメーナが勘違いしたらしい。ご足労戴いたが、それは許してくれ。……お前さん達をもうこれ以上お引き留めはしない。

フィルメーナ（三人が出て行くこうとするのを。）ちょっと待って。私は勘違いなどしていません。ちゃんとお前さん達だと分かっていて呼んだのです。（ドメニコに。）あなたには何の関係もないことです。

ドメニコ（しっかりと。）公衆の面前で自分の家の内輪もめを出そうというのか、お前は。

フィルメーナ（何か自分には予期出来ない、自分に不利なことが起きたらしいと感づく。ドメニコの落ち着いた、決意溢れる様子からもそれを察して、三人に。）あんた方三人、ちよつとの間、テラスに出ていて頂戴。

リツカルド（腕時計を見て。）待って待って、って、これはいくら何でも酷過ぎますよ。私は家にいっぱい用事があるんです。

フィルメーナ（抑えつけるように。）言われた通りにするんです。外で待っていなさい！ 他の二人も待つ。だからあなたも待つんです。

リツカルド（断固としたフィルメーナの調子に押されて、仕方なく。）分りました。じゃあ・・・（二人の後に嫌々続く。）

フィルメーナ（ロザリアに。）三人にコーヒーを出してやつて。

ロザリア はい、只今。（三人に。）じゃ、あつちの方に出て。もっと離れたあつちの方。その方がいいわ。（方向を指さす。）今すぐコーヒーを持って来ますからね。（左手奥の方に退場。三人もテラスに退場。）

フィルメーナ（ドメニコに。）それで？

ドメニコ さつきも言った。こちら弁護士さんだ。この人の話を聞くんだな。

フィルメーナ 弁護士などと話をする時間はないの。あなたの話なら聞きましよう。

ノチエツラ 最初にこのことは申し上げておかないと、奥様 つまり私は、お宅の事には全く関つてはおりませんので。

フィルメーナ 関つてない？ じゃ、ここで何をしているの？

ノチエツラ 関つていないと申しますのは、つまり、ここにおられる紳士の事件を私が担当している訳ではないということでした。つまり、この紳士は私の顧客ではないという意味なので・・・

フィルメーナ でも、ここにちゃんと来ている・・・

ノチエツラ いえ、その・・・ええ、まあ・・・

フィルメーナ（皮肉に。）誰かがあなたをここへ連れて来たつていうことね？

ノチエツラ ええ、まあ・・・普段、第三者の指示によって動くことはやらない主義なのですが・・・その・・・

ドメニコ（フィルメーナに。）この人に話をさせたらどうなんだ。

ノチエツラ 実はその、私がこの件に関心を持ったのはつまり、この若い婦人が・・・（と言つて後ろを振り向く。そこにディアーナがいないので驚き、書齋の方に目をやる。）あの人はどこです。

ドメニコ（苛々と。）この件に関心を持った理由など、どうでもいいでしょう。早く話の要点を。

フィルメーナ（皮肉をこめて。乱暴に。）あそこでしょう。ここへ出て来られないのよ。意気地がないからね。（ノチエツラに。）それで？

ノチエツラ エー、つまり、この紳士から説明を受けたところによりますと・・・いや、あの婦人の説明だ・・・とにかく、第一〇一条・・・ここに書き抜いておきましたか、（一枚の紙を取り出し、皆に見せる。）・・・この第一〇一条によれば全く明らかです。標題は、「まさに当該契約に入らんとする一組の男女のうち一人に、切迫した、ないしは、現実の、生命の危険がある場合・・・」云々、云々。ここで条件文は終ですが、この件の場合、生死の危険は存在しなかつたと私は判断致します。切迫も、或は、現実の危険もです。何故なら、ここにおられる紳士の証言によれば、全てのこと嘘だつたからであります。

ドメニコ（急いで。）証人がいます、ちゃんと。アルフレード、ルチア、門番、それにロザリーア。

フィルメーナ それに看護婦！

ドメニコ そう。看護婦もだ。全員だ。神父がいなくなつたそのとたん、飛び起きたんだからな。まるでびっくり箱の人形だ。そして、「ダウンミ！ 私達、夫婦なのよ！」ときた。

ノチエツラ（フィルメーナに。）そうするとこの際、第一二三条がきいてきますな。（読む。）「強制、或は故意の虚偽によつて同意が導かれた契約下にある男女においては、その婚姻の有効性に異議を申し立てることが可能である。」「この際、虚偽は明らかです。従つて、第一二三条により、異議

申し立てが可能となります。

フィルメーナ 何のことかさっぱりね。

ドメニコ（彼にも意味は不明のだが、法の正しい解釈を、相手に示して、さつさと議論を終にしたために言う。）つまりだ、お前が死にさえすれば、私はお前と結婚していただらうということさ。

ノチエツラ 失礼ながら、それは違つています。結婚は条件付きでなされてはならないことになっています。第何条か、はつきりと覚えていません。が、しかし、法律は疑問の余地なく次のように述べております。「もしも当該男女が、結婚に際し、条件つきである場合には、担当の戸籍係、或は式を司る神父・・・当該結婚の場合に応じていづれでも・・・式を継続することが出来ない。」

ドメニコ しかしあなた、今さっき言ったぞ。生死に関する危険は全くなかつたと・・・

フィルメーナ（突然。）何を言つてるの、あなた。こんな法律の話、あなたにもどつせチンブンカンブンなんでしょう？

（ノチエツラに。）もっと分る言葉で話すんですね。

ノチエツラ（フィルメーナに紙を渡して。）これが法律です。ご自分で読んで下さい。

フィルメーナ（全く見もしないで、その紙を破る。）字は読めないの、私は。それに、知らない人から手紙など、私は受取りませんからね。

ノチエツラ（怒つて。）ではこういう言い方にしましょう。

あなたはすぐ死ぬ、という状態ではなかつた。ですから結婚式は執り行われなかつたと同じである。つまり、結婚式は無

効だ、と。

フィルメーナ　じゃ、神父様はどうなるんです。

ノチェツラ　神父も、私の言った通りを確認することになるでしょう。それだけではない。あなたが神の冒瀆を行ったと言うでしょう。とにかく式は無効です。

フィルメーナ　無効……でも、もし私が死んでいたら……

ノチェツラ　ああ、それなら……

フィルメーナ　ええ、それなら？

ノチェツラ　その場合には、結婚式は有効だったでしょうな。

フィルメーナ（ドメニコを指さして。ドメニコの方はこの時まで阿呆面をしている。）その場合にはこの人は、私の死んだ後すぐまた結婚式を上げていたわ。子供も出来ていたかもしれない。

ノチェツラ　その通り。結婚していたでしょう。勿論、男やめとしてです。ミスイズ・フィルメーナ・ソリアーノなる女房を亡くした男やめとして、次の結婚式にのぞむ、という訳です。

ドメニコ（フィルメーナを指さして。）こいつが、ミスイズ・ソリアーノ？……ああ、これが死んでいた場合に……有難いことに。

フィルメーナ（苦い皮肉をこめて。）その方があなたには向いていたかもしれないわね。でも、それが法律っていうもの？　一生かけて、家族みんなが一つになって暮せるように努力して、結局最後は法律がそれを許さないって。

ノチェツラ　状況がどんなに同情をかうものであっても、

もしそれが相手方に対する策略を伴う場合、法はそれを決して支持することはありません。ドメニコ・ソリアーノは、あなたと結婚する意志は、過去にもなく、また現在もないのですから。

ドメニコ　そうだ、お前もこのところは性根を入れて聞いておくんだな。この点でお前に何か疑問があるなら、お前の方でも弁護士を雇えばいい。どうせせいとも同じことしか言わんだらうがな。

フィルメーナ　その必要はないわね。あなたが言っていることを鵜呑みにしているんじゃないの。その誰かさんがそう言ってるからでもないわ。あなたのその顔を見れば分る。あなたまた、立ち直ったわ。嘘をつく時はあなた、決して人の顔をじつとは見ない。今までだってあなたは嘘はつけない人だった。今あなたが言ったことは、だからみんな本当なの。³⁰

ドメニコ　ミスター・ノチェツラ、どうか先に進めて……

ノチェツラ　ええ、では……

フィルメーナ（ちよつと考えた後、ノチェツラが最後に自分に言った台詞に対する答を言う。）そう。私にもない、この人と結婚する意志なんて。（ドメニコに。）分ったわね。あなたとなんか結婚したくないの。（ノチェツラに。）そう、あなたは「先に進める」ことね。私はこの人なんかいらぬ。私が死にかけていたっていうのは嘘。それは認めるわ。たしかに策略。私はただ、この人の名前が欲しかったの。（テラスの三人を呼ぶ。）さあ、あんた方、入ってらっしゃい。

ドメニコ（優しく。）なあお前、いいじゃないか……

フィルメーナ　黙っていなさい！（テラスからリツカルド、

ウンベルト、ミケーレ、登場。同時にロザリーア、右手奥から、コーヒー三カップを盆に載せて登場。しかし、コーヒーの時間ではないらしいと、机の上に置き、自分も坐る。フィルムメーナ、三人に言う。(ここに居る二人はね、世間で成功者って言われている人達。困ったことや、不都合なことがあれば、紙の上に字を書いて、自分を守るの。(今度は自分を指さして。))この私、フィルムメーナ・マルトゥラーノは違う。困ったことがあっても泣きさえ出さない。ダウンミ、そう言ってるのね? 世間では私のことを、「あいつが涙を流しているの、見たことあるか?」って。そう。私は何でも真直ぐにやってきたの。涙なんか流している暇はなかった。見て、ほら。私の目はすっかり乾いている。(じっと三人を見て。)

私はお前達三人の母親です!

ドメニコ フィルメ!

フィルムメーナ(しっかりと。お黙りなさい。子供達の前で、私が母親だと言って、どこが悪いの。(ノチェツラに。))これを禁ずる法律でもあるのですか。(挑むように。)そう。お前達は私の子供。そして私はフィルムメーナ・マルトゥラーノ。・・・これ以上言う必要はないわね? お前達はもう大人。この私がどういふ女か、もうきつと噂で知っている筈。(三人、まるで化石したよう。ウンベルトは真つ蒼。リッカルドは困って自分の靴を見つめている。ミケーレは驚き、同時に心を動かされた様子。)私がこつなつたのは十七歳の時。(間。)ミスター・ノチェツラ、あなた、スラム街ってどんなところかご存じ? サン・ジオヴァンニに、ヴェルジニに、フォルチェツラに、トゥリビユナーレに、パルネットに、あ

る、あのスラム街を。黒く煤けた小屋。・・・中の部屋には人がいっぱい。夏は暑くていられない。冬は寒くて、歯の根があわない。私はそういうスラム街の出。ヴィコ・サン・リポーリオの。家に人がどれだけいたか。あまり多くて数えたこともない。その人達がどうなつたか、私は何も知らない。正直を言えば、知りたくもない。覚えてるのはただ、その人達の、いつも唯(いが)み合っている餓えた顔。夜寝る時、「お休み」の一言も言つたことがない。朝起きた時、「お早う」の挨拶さえない。優しい言葉など交されたことがない。ただ一度、私にかけられた優しい言葉・・・それは父親からだった。あの言葉を思い出す時、今でも私はぞつとする。あの時私は十三歳だった。父親は言つた。「お前はもう大きい。それに、うちには食い物はあまりないんだ」と。それからあの暑さ。夜、戸を閉めると息がつまりそうだった。みんながテーブルの周りに坐つた。大きな皿、一品だけ。それに何本のフォークがついていたことか。私には分つていてもよかつた。でも、皿の中に私のフォークが入る度に、みんなは私を睨んだ。まるで私が食べ物盗んでいるかのような目で。十七歳になつた時、とても綺麗な格好をしている人達に気づいた。綺麗な靴を履いて通りを歩いている・・・私はただじつと見ていた。ある晩私は昔知つていた女の子に出会つた。あまり綺麗になつていて、最初は誰だか分らなかつた。あの頃私は今よりはずつとああいうことに価値を置いていた。その子は私に言つた。(注意して一言一言を言う。)あなたはね、こうすればいいの・・・そしてこうして・・・そしてこうすれば・・・。私はその晩、一睡もしなかつた。それにあの暑

さ。(ドメニコに。)その時よ、あなたと会ったのは。(ドメニコ、ギクツとする。)(あの「家」！私の目にはあれでも宮殿に見えた。その夜私は、ヴィコ・サン・リポーリオの家に帰った。私の心臓は破裂しそうだった。きつとみんなは家に入れてくれない。目の前で戸を閉められてしまう！でも違った。誰も一言も言わなかった。それどころか、一人は椅子を出してくれた。一人は頬をさすってくれた・・・みんなが私を見ていた。まるで尊敬しているかのような目付きで。皆は私の前で、居心地が悪かった。違ったのは母親だけ・・・私は母親に近づいて、「さよなら」と言った。母親は顔をそむけて、涙を流した。私は二度と家には帰らなかった。(大声で。)私は息子達を殺さなかった！私は二十五年間、私の家族の面倒をみたんだ！(リックアルド、ウンベルト、ミケーレに。)私はお前達を育てた。大人にしあげた。あの男から盗んだのよ。お前達が育つように！

ミケーレ(優しく、フィルメーナに近づいて。)分りました。でも、どうか落ち着いて。精いっぱいやって来られたんです・・・

ウンベルト(近づいて。)お話したいことは沢山あります。でも、僕は口べたで・・・そう。手紙を書きます、僕は。

フィルメーナ 私は読めないわ。

ウンベルト じゃ、僕が自分で読んであげます。

(間。フィルメーナ、リックアルドを見る。何か言って欲しい。リックアルド、一言も言わず、退場。)

フィルメーナ 行ってしまった・・・

ウンベルト(同情をもって。)(あいつはいつもああなんだ。

よく分ってないんですよ。明日私が店に行つて来ますよ。よく話をしてやります。

ミケーレ(フィルメーナに。)(僕の家に来て下さい。一緒に住みましょう。小さい家ですけど、何とかありますよ。小さなバルコニーだってありますからね。(楽しい事を心に描いて。)(うちの子供達はみんな、「家にはおばあちゃんはいないの」って「どこにいるの? おばあちゃんは」って、よく言つんですよ。その度に、こちら馬鹿な言い訳を言ってきたんです。でも二人で家へ帰ったら大声で言えますよ、今度は。「さあ、これがおばあちゃんだ」ってね。みんな飛びついて来ますよ。(促すように。)(さあ、一緒に行きましょう。

フィルメーナ(決心する。)(そうね。行くわ、あなたの家

32

ミケーレ さあ、行きましょう、じゃあ。

フィルメーナ ちょっと待って。下で待っていて頂戴。

(ウンベルトに。)(お前もこれと一緒に下りていて。五分もかからない。私、ちよつとドン・ドメニコに言うことがあるの。

ミケーレ(嬉しく。)(じゃあ、すぐにね。でも、急いで。

(ウンベルトに。)(行ってましようか?)

ウンベルト うん。

ミケーレ じゃあ、皆さん、失礼。(右手の扉に進みながら。)(何かあるな、と思っていたんだ。だから来た時お喋りになっていたんだ・・・予感がしたんだよ・・・)(ウンベルトと共に退場。)

フィルメーナ（ノチェツラに。）一、二分私達二人だけに
して下さい。いいですか？（書齋を指さす。）

ノチェツラ ええ。どうせ出ようと思っただけのところから。

フィルメーナ いいえ。出ては行かないで。まだちょっと
いて戴きたいの。この人との話が終つたら、お話があるの。
（ノチェツラ、嫌々ながら書齋に退場。ロザリア、自分で
判断して右手奥の扉から退場。フィルメーナ、自分の鍵を取
出し、テーブルに置く。）私は出て行きます、ドゥンミ。あ
の弁護士に、法律上の手続きをとるよう言つて下さい。私は
言われる通りします。あなたはもう自由なの。

ドメニコ それしかお前には手はない筈だ。だいたい何故
最初から金でことをすませなかつたんだ。何故わざわざ芝居
をうつたり・・・

フィルメーナ（決心は堅く。）明日、私の荷物は取りに来
させます。

ドメニコ（動揺して。）お前は馬鹿だよ。あの連中は放つ
ておいてやれば良かったんだ。何故あんなことをわざわざ話
したんだ。

フィルメーナ（冷たく。）何故つて。それはあの三人のう
ち一人があなたの子供だから。

ドメニコ（フィルメーナの今の言葉で呆気にとられる。内
心の動揺を必死に抑えようとする。）そんなこと、この俺が
信じるか。

フィルメーナ あのうちの一人があなたの子なんです。

ドメニコ（静かに。）嘘だ、それは。

フィルメーナ 三人ともあなたの子つて言つた方が本当は
よかつたの。その方があなただつて信じ易い筈だつたの。

ドメニコ 嘘だ。

フィルメーナ いいえ。本当です、ドゥンミ。それは本当
なの。あなたは覚えていつこない。でもね、これだけは言っ
ておきましょう。あなたはいつもどこかへ出かけていた。ロ
ンドン、パリ・・・馬のため・・・女のため・・・あなた、
覚えているわね、そういう時にはいつも私に百リラ札をくれ
たの。その晩、あなたは私に言つた、「フィルメ、二人は愛
しあつてる・・・そういうふうでもしようや。」そして灯
（あかり）を消したの。あの晩私は、本当にあなたを愛した。

でもあなたは違つた。灯をまたつけて、あなたはいつも百
リラ札をくれたわ。その札の端っこに、私は日付を書いてお
いた。私は字を知らない。だから普通の数字じゃないわ。そ
れからあなたは旅行に行つた。私はじつとあなたの帰りを待つ
た。それがいつのことか、あなた、覚えてはいないでしょう。
あなたが帰つて来た時、私はすっかり隠していた。変りはな
いわよ、とあなたに言つた。だって、あなたは何にも気づき
はしなかつた。だから生活を変えるなんて決してしない方が
よかつた。

ドメニコ（荒々しく。心配を怒りで隠そうとするように。）
どいつなんだ。俺の子は。

フィルメーナ（きつぱりと。）いいえ。それは決して教え
ません。

ドメニコ（一瞬躊躇つた後。衝動に負けて。）そいつは嘘
だ。本当である筈がない。その時に俺に言つた筈だ。俺を縛つ

ておけるからな。俺に子供が出来たとなればフィルメ、それはお前の武器になる。それをお前が利用しない訳がない。

フィルメーナ 話したらあなた、きつと私におろさせたわ。私はとても言えなかつた。あの頃のあなたの考え、今だつてちつとも變つてはいない。ええ、あなたきつと私におろさせたわ。あなたは私に感謝するべきなの。ちゃんとあなたの子供が生きているんですからね。

ドメニコ どれなんだ、それは。

フィルメーナ 言いません。三人とも同じ扱いを受けなきゃいけないの。

ドメニコ (意地悪く。) じゃ、三人とも同じ扱いだ。三人ともお前の子なんだ。俺には何の関りもない。あいつらのことは・・・そのうちの一人だつて俺は知らないぞ。さつさと出て行け!

フィルメーナ 昨日あなたに言つたわね? 私は。守れもしない誓いは立てるなつて。覚えているわね? 私は言つたわ。あなたも誓いなんかしては駄目。夜も眠れなくなる。私の足元にひれ伏さなきゃならなくなるつて。・・・そう、ドウシ、あなた、今私が言つたことを決して子供達には言わないの。いいわね? もし言つたりしたら、私、必ずあなたを殺す。これはあなたが私にしょつ中やる、安っぽい脅しとは違つたの。私がいつたん殺すと言えば、私は本当に殺す。分つたわね? (書齋の方に呼ぶ。) ミスター・ノチエツラ! 入つて来て・・・ (ディアーナにも。) あなたも入つて。噛み付きはしないわ。あなたの勝。私は出て行きます。(再び呼ぶ。) ロザリー、ちよつと来て頂戴。(ロザリア登場。フィルメ

ナ、ロザリアを抱擁。) 私、家を出る。明日荷物を取りに人をやります。(ノチエツラ、書齋から登場。その後ろにディアーナ、アルフレードも奥から静かに登場。) これで決着。さようなら、みなさん。ミスター・ノチエツラ、こんなことに引つ張り込んですみませんでしたね。(ルチア登場。) ドウンミ、私の言つたこと、よく分つているわね? (強いて陽気に。) この人達みんなの前で、ちゃんとあなたに言つておくわ。私の言つた事、決して漏らさないことね。誰にも。じつとあなたの胸にしまつておく事。(首にかけていた口ケツトを開け、汚い紙幣を取出し、角(かど)の小さな部分を切り取り、ドメニコの方を向く。) 昔書きとめた場所はとつておくわ。残りはあなたのもの。(紙幣をテーブルに置く。侮蔑の陽気さで、つけ加える。) お金で買えないものが世の中にはあるの。(退場。)

(幕)

34

第三幕

(同じ部屋。十箇月後。午後遅く。)

(到るところに花。花束に、花のついた小枝。贈り主からのカードがそれについている。花は赤や白のけばけばしいものでなく、落ち着いた色。お祭り気分が漂っている。書齋と居間とを分けるカーテンが引かれていて、書齋は隠されている。

ロザリアが一張羅の服を着て、右手奥の扉から登場。と同時にドメニコ、書齋から登場。ドメニコはすっかり前幕とは變つてゐる。怒り狂つ調子は見られない。今や静かな謙遜を絵に描いたような表情。髪は少し白いものが多くなつてゐる。)

ドメニコ（ロザーリアに。）外出していたのか。

ロザーリア ええ。ドンナ・フィルメーナのお言い付けで。

（ドメニコを擲（からか）うように。）あらまあ、やっかんでいらっしやる・・・ヴィコ・サン・リポーリオにですよ。

ドメニコ 何の用でだ。

ロザーリア（ゲラゲラつと笑う。）まあまあ・・・本当にやきもち！

ドメニコ 何がやきもちだ。馬鹿！

ロザーリア 擲っただけですよ。（フィルメーナの寢室の扉をちらと見て。）お教えしますよ。でも、私が言っただけで奥様には仰らないで下さいよ。知られたくないんですから、奥様は。

ドメニコ それなら、言わなくていい。

ロザーリア 知って戴いた方がいいんです。あの方の名誉になることなんです。ヴィコ・サン・リポーリオの薔薇の天使様の像に、五十本の蠟燭と千リラを寄進して来なさいって言われたんです。あそこの傍に、おばあさんが住んでいて、あの像の面倒を見ているんです。その人に、丁度六時に、五十本の蠟燭全部に火をつけて貰うよう頼んで来いって。どうしてか分りますか？ 結婚式が六時だからですよ。ここで式が行われる丁度その時、あそこの薔薇の天使の像で蠟燭に火が灯（とも）るのです。

ドメニコ なるほど。

ロザーリア あの方は聖女。旦那様は聖女と結婚なさるんです。お美しくって、それにお若いわ。私、前からずっとあの方に言っていた。旦那様があなたをお捨てになるなんて、

そんなことありっこありません。結婚を御破算したのは、旦那様の主義から出てきた話・・・必ずお戻りになります・・・ドメニコ（ロザーリアのお喋りに少し飽きて。）分った分った、ロザーリ、行って、手伝でもしたらどうなんだ？

ロザーリア ええ、ええ。すぐに。（しかし動かない。）みんな、みんな、ドンナ・フィルメーナのお陰。あの方がいらっしやらなかつたら、私なんかどうなっていたでしょう。私、ここにいていいと仰るんです。死ぬまでここにいていい

て。

ドメニコ 好きにするさ、お前の。

ロザーリア 私、みんな用意しましたわ。帽子にレースの縁取りのある白いガウンに、下着に、白いストッキングに。全部きちんと筆筒に入れて。ドンナ・フィルメーナは何がどこにあるかちゃんと分っていらっしやいます。私にさせて下さい。だって他に誰がいるっていうんです？ ああ、これで息子達さえ帰って来てくれれば・・・これはじっと待つしかないわ。さ、私はもっ行かなくちゃ。（左手から退場。）

ドメニコ（一人になり、花を眺める。一、二、カードを読む。最後の部分だけを声に出す。）・・・お幸せに、か。（舞台裏からウンベルト、リツカルド、ミケーレの音がする。）

ミケーレ（舞台裏で。）分った、分ったよ。だけど式は六時にならなきゃ始まらないんだろっ？

リツカルド（舞台裏で。）そりゃそうだ。しかし約束は五時だったんだ！

ウンベルト（舞台裏で。）とにかく私は時間通り来た。

（三人、話しながら登場。）

ミケーレ 五時の約束だった。それは分ってる。だけど僕は、四十五分遅れただけなんだ。

リツカルド 遅れた「だけ」か。四十五分も遅れておいて。

ミケーレ いいか、約束するのは普通、三十分の余裕はあるものなんだ。だから五時に約束すれば、五時半は普通。だから五時四十五分は許される時間なんだ。

リツカルド（皮肉に。）うん まあ、次の日でもな。いや、次の月でもいいわけさ。

ミケーレ それに、うちには四人もいたつら小僧がいるんだ。だから時計は持たないことにしている。この間、持っていたやつを滅茶滅茶に壊されちまった・・・

ウンベルト（ドメニコに気づく。丁寧に挨拶する。）今晚は、ドン・ドメニコ。

リツカルド（こちらも礼儀正しく。）今晚は、ドン・ドメニコ。

ミケーレ 今晚は、ドン・ドメニコ。
（三人黙ってドメニコの前に一列に並ぶ。）

ドメニコ 今晚は。（長い間）おいおい、急に黙っちゃまったな。さつきまで賑やかにやっていたじゃないか。

ウンベルト（困って。）ええ、その、話してはいましたが・・・

ミケーレ・・・会話が丁度終になって・・・
ドメニコ 私を見たたん、か？（ミケーレに。）お前は

どうやら、みんなを待たせたらしいな。
ミケーレ ええ、そうなんです、ドン・ドメニコ。

ドメニコ（リツカルドに。）君はちゃんと時間通りだった。

リツカルド はい、そうなんです、ドン・ドメニコ。
ドメニコ（ウンベルトに。）君は？

ウンベルト 私は定刻にきました、ドン・ドメニコ。

ドメニコ（独り言で。）定刻にきました、ドン・ドメニコ、か。（間。他人行儀の「ドン・ドメニコ」が気に入らない。三人に。）さあ、みんな、坐ってくれないか・・・

（三人坐る。）まだ時間は充分ある。神父さんは六時にならなきゃ来ない。それまではこの四人だけだ。フィルメーナは客が大勢なのを嫌ってな。二人の立会人をつけるのは仕方がないが、他には招（よ）ばなかつたんだ。いや、実は・・・

私の言いたいのは・・・これは大分前にも言ったと思うんだが・・・その・・・私のことを言う時にだが・・・何か・・・

工夫があつてもよいだろうと・・・

ウンベルト（おづおづと。）ええ、まあ・・・
リツカルド（同様に。）ええ、その・・・

ミケーレ ええ、確かに・・・
ウンベルト でも、はつきりこう呼べと、具体的には・・・

ドメニコ うん、まあ、具体的には、私はまだ言っていない。君達が自分で考えてくれるのが一番だと思つてな。今夜私は、君達の母親と結婚する。それから弁護士とも、もう

話はついているが、君達のことも決っている。明日からは君達は私の名前、つまり、ソリアーノと名乗る訳だ・・・

（三人、顔を見合わせる。何と言つていいか分らない。誰かが何かを言つて欲しいという気持。）

ウンベルト（勇気を出して。）ええと、三人に代つて私がお答えします。多分三人とも私と同じ気持だと思ひますので。

正直のところ、ご期待に沿う呼び名……これは当然、我々に要求されてしかるべきものですし、またそれがお心の広さを表して下さっていることなのですが……その呼び名で呼びずる気持になれなくて……自然に、本能的に、そう呼べる気持になりませんと……

ドメニコ（心配そうに）「つまり、君達は、本能的にそう……呼べないかと？　つまりその……何ていうか……私をその……「お父さん」と……」

ウンベルト ええ……まあ、その……それ以外の呼び方をするのは、大変失礼だとは思いますが……ええ、今のところは、ちょっと……

ドメニコ（リツカルドに）「君はどうだ。」

リツカルド すみません。しかし、同じ意見で。

ドメニコ（ミケーレに）「君は。」

ミケーレ 僕もみんなと同じで、ドン・ドメニコ。

ドメニコ まあいい。そのうち考えが変わるかもしれない。（間。）いや、君達が揃って来てくれて、私は実に嬉しい。

君達はみんな私によく似ている。それぞれの分野で、勤勉に働いている。辛抱して立派な働きぶりをしているんだらうな。いや、頼もしい若者だ。（ウンベルトに）「君は事務所で働いているんだね？　何か書いてもいるという話だが。」

ウンベルト ええ、ちょっとした短い話を……

ドメニコ 偉大な作家にならうというんだな？

ウンベルト いえ、そんな野心はありません。

ドメニコ いや、そのぐらいあったっていい。まだ若いんだ。君の職業で成功するためには、それはかなりの克己を必

要とするが、君は多分それを生れついて持っている……

ウンベルト いえ、私にはそういう才能はどうも、生まれつき持ち合わせていないようです。ちょっと仕事がうまく行かなくなると、すぐ「待てよ、この職業は俺には向いてなかつたんじゃないか？　本当は別の仕事の方が……」と考えたものです。

ドメニコ（自分に似ているな、と興味を引かれて。）「ほう、そうか。すると、他にどんな職業が向いていると思つたんだ？　ウンベルト よく分りません。若い頃はさんざん色々なことを考えるものだから……」

リツカルド 何が向いている職業か、って話になれば、まづ運というものを考えなきゃ。僕は今ヴィア・チアリアに店を持っていますが、どうして持てるようになったと思ひます？　運ですよ。運。丁度その頃、僕はシャツ仕立屋の綺麗な女の子に惚れちまつたんですよ。

ドメニコ（こちらが怪しいと感じて。）「ほほう、すると君は、すぐ女の子に惚れるタイプだね？」

リツカルド ええ、次から次ですね。（ドメニコ立上り、リツカルドを近くからじろじる見る。自分の若い頃の動作、口ぐせ、など発見できないかと。）「実を言うのですね、ピツタリ自分のタイプっていう女の子をどうしても見つけることが出来ないんですよ、僕は。ちょっと女の子を見る。するとすぐ好きになつて考えてしまう。あ、あれは僕のタイプだ。もう少したつと、よし、あれと結婚しよう。それからまた別の綺麗な女の子を見る。ああ、こつちの方が前よりもつと僕のタイプだ。こんな調子で、一人に決まるつてことがないん

です。少し先に行くと、すぐ前のよりいい女の子が現れてしまつんですから。

ドメニコ(ウンベルトに。)君は彼みたいになつてはいないんだらう？ 女の子に關してはかつちりとした何かがあるんじゃないか？

ウンベルト ええまあ、ある程度は。でも、今の女の子達つて、こちらに落ち着いて考える暇をくれないんです。あつちを見る。いい女の子。こつちを見る。いい女の子。それに、どれもこれも、すぐなびいて来そうな素敵な目付き。選ぶのは難しいですよ。こつちう時にはどついたらいいんでしよう。

仕方がないから当座は相手に合わせてこちらでもウロウロするだけです。そのうち本当にピッタリのが見つかるでしょう。

(ドメニコ、がつかり。ウンベルトとリツカルドはどちらも自分と同じ性癖。)

ドメニコ(ミケーレに。)君は女好きっていう訳じゃないんだな？

ミケーレ 僕は若くして結婚したんです。今の女房に會つて、まあ、成行きで。ところが、こいつの手綱が厳しくて。うちの女房を知つてりや、僕が身動きがならないことはすぐ分つて戴けますよ。仕方がないから、僕は真直ぐ歩いてますがね。目移りがしないなんてことは、全くありませんよ。とんでもない。でも、女房が怖いですからね。

ドメニコ(がつかりして。)そうか。君も女好きか。(間。それから、別の手を考える。)若い頃私は歌を歌うのが好きでね。七、八人、同じ仲間が集まつて、青空の下で連中と食事をして、その後歌うんだ。ギター、マンドリン・・・君達

も歌うのは好きかね？

ウンベルト 私は駄目ですな。

リツカルド 僕も駄目です。

ミケーレ(明るく。)僕は好きです。

ドメニコ(喜んで。)おお、好きか。

ミケーレ 仕事中は歌はかせませんからな。店では僕はいつでも歌っていますよ。

ドメニコ(希望をもつて。)じゃ、聞かせてくれないか。

ミケーレ(急に赤くなつて。)僕が？ 何を歌うんです？

ドメニコ 何でもいい。好きなものを。

ミケーレ いや、それは・・・僕は恥ずかしがりやで。

ドメニコ でも、今言つたばかりじゃないか。いつでも歌っているつて。

ミケーレ それは話が別で・・・まあいいや、「コーレ・38
ングラート」を知つてますか？ こいつはいいんだ。(歌い始める。ひどい調子外れ。それに艶のない声。) Core, Core, 'ngrato -- 'thai pigliato 'a vita mia -- tutto e' passato -- io non ce pienzo chiu' ...

リツカルド(割つて入つて。)あれなら僕でも歌える。あれが声つて言えるのか、一体。

ミケーレ(少し怒つて。)どつちう意味だ、それは。

ウンベルト 私でもあれよりはました。

ドメニコ 誰だつて、あれよりはましたらう。(リツカルドに。)じゃ、聞かせて貰おう。

リツカルド 僕は駄目です。あいつほど厚かましくはありませんからな。でも、まあいいや。Core, Core, 'ngrato --

thai pigliato 'a vita mia -- (ウンベルトも加わる。) tutto
e' passato -- (ミケーレも加わる。) io non ce pienzo
cchiu' ...

(とても聞いたものではない。ひどい合唱。)

ドメニコ(途中で遮って。) もういい。 もういい。 分った。

(三人、歌い止める。) どうも三人とも、今日は調子が悪い
らしいな。 . . . (傍白。) 呆れたもんだ。 . . . ナポリ生
れが三人。 それも三人とも歌えないとは!

(フィルメーナ、左手から登場。素晴らしい新しいドレス。
ナポリ風のファッションで髪を「アップ」にしている。真珠
の首飾り二巻きに、クリップ式のイヤリング。若く見える。

フィルメーナは仕立屋のテレズイーナと言いつ争っている。テ
レズイーナはロザリア、ルチアと共に、フィルメーナの
後から登場。)

フィルメーナ 何かピツタリしないわ。 どこか仕立てを間
違つてるのよ。

(テレズイーナは典型的なナポリの仕立屋。客の癪癢や侮辱
にはびくともしない。その落ち着き払った態度が腹立たしい
ほど。)

テレズイーナ 勝手にそう思つてらつしやるだけですよ、
ドンナ・フィルメーナ。 ピツタリの仕立てですよ。 私はもう
何十年と仕立屋をやつてきていますから。 自分の仕事
くらい知っていますよ。

フィルメーナ 厚かましいね、あんた。 私が言っているの
よ、ピツタリしないって。 私が言つてるんだから言つことを
聞いたらいいでしよう。

テレズイーナ じゃ、どこが合わないのか、仰つて下さい。

ミケーレ 今晚は、お母さん。

リツカルド 今晚は。 それから、おめでと〜ございます。

ウンベルト 今晚は。

フィルメーナ(嬉しい驚き。) ああ、あんた達、もう来て
いたの。 今晚は。(テレズイーナに。 しつこく。) どうして
ピツタリしないか教えて上げましょう。 いいですか。 あんた
はね、お客から生地(きじ)を受取ると、あんたの子供にそ
の生地を切つて、服を作つてやるの。 だからなのよ。

テレズイーナ まあ、何てことを . . . 私はそんな . . .

フィルメーナ 前にあつたの。 私の注文した生地があんた
の娘の洋服になつていた。 その残りで私の服を作つたに決つ
てる!

テレズイーナ そんな言い方ありませんわ。 私、怒ります³⁹

よ。 勿論、お客様の洋服の仕立てが終つて、生地が余れば . . .
(フィルメーナ、非難するようじつとテレズイーナを見る。)

でも、お客様が必要な分まで取るなんて、そんな . . . そん
なのはインチキになりますわ。

ロザリア(感心して。) まあ、ドンナ・フィルメーナ、
お綺麗ですこと! 本当に、本当に、花嫁さん!

テレズイーナ じゃ、どういふ風に服を仕立てたらしいつ
て言うんです。

フィルメーナ(怒つて。) 渡した生地を盗まないで作るの
よ。 それが作り方つていうもの!

テレズイーナ(傷ついて。) 盗むなんて言わないで下さい。
生地が余つてるなんて思つたらと〜んでもない間違い。(手

でほんの少ししか残っていないという動作をする。()

ドメニコ(この時まで、何か奇々と二人のやりとりを見て
いる。心ここにあらざる様子。) フィルメ、お前に話がある
んだ。

フィルメーナ(ドメニコの方にびっこをひいて近寄る。新
しい靴が合わない。) まあ、この靴ったらー!

ドメニコ 痛いのか? じゃ、脱いで、別のを履くんだ。

フィルメーナ 何なの? 話つて。

ドメニコ テレーズィ、ちよつと外して貰いたいんだ。

テレーズィーナ ええ、構いませんとも。行きますわ。(運
んでいた黒い布を畳んで、片手につかかけ。) おめでとござい
ます。どうぞお幸せに! (ルチーアに。 出て行く時に。) 奥

様の次のドレスはどんなのにするか、教えて頂戴ね。(退場。
ルチーア、その後から退場。)

ドメニコ(リッカルド、ウンベルト、ミケーレに。) 書斎
に行つていてくれ。 立会人の人達の面倒をみてな。 ロザーリ、
お前もだ。

ロザーリア(頷く。) 畏まりました。(他の三人に。) さ、
行きましょ。 (書斎に入る。)

ミケーレ(二人の兄弟に。) じゃ、行くか。

リッカルド(ミケーレを擲つて。) 素晴らしい声じゃない
か。 お前、商売を間違えたよ。 実にカールソーバリの声だ。 . . .

(三人、笑いながら書斎に入る。)

ドメニコ(フィルメーナを感じて眺めながら。) フィル
メ、何て綺麗なんだ。 どこから見ても若い娘だ。 私は頭ははっ
きりしているぞ。 その姿で街を歩いたら、男どもみんな、振

り返つて見る。 そいつは請け合つよ。

フィルメーナ(故意に話題を外して。 次にドメニコが言う
台詞が想像出来るため。) 用意は全部整っているようよ。 私、
嬉しいわ。

ドメニコ 私は違う。 私は心配だ。 どうも落ち着かない。

フィルメーナ(故意にドメニコの言葉を誤解して。) 心配
することなんか無いのよ。 ルチーアの指示通りすればいいの。
勿論アルフレードもロザーリアもいるわ。 でも本当に頼れる
のは. . .

ドメニコ 私の心配はお前には分つている筈だ、フィルメ。
知らないふりは止めてくれ。 この胸が今どうなっているか。
(間。) お前には出来るんだ、この胸のつかえを取り除くこ
とが。

フィルメーナ 私が. . . 出来る?

ドメニコ お前が望んでいたものを叶えてやろうとしてい
るんだ。 それでお前は満足じゃないのか? あの時結婚は一
旦無効になった。 その後、私はお前の家を訪ねて行つた。 . . .
一度だけじゃない。 何度もだ。 その度に家のものに留守だと
お前は言わせた。 しかし私は諦めなかつた。 そしてお前に頭
を下げて頼んだ。 フィルメ、結婚してくれ、と。

フィルメーナ そつね。 だから今夜結婚するの。

ドメニコ お前、嬉しいのか? 少しは。

フィルメーナ ええ、勿論。 嬉しいわ。

ドメニコ じゃ、私も幸せにしてくれないか。 さ、坐つて。
聞いてくれ。(フィルメーナ、坐る。) この二、三箇月、何
度私はお前に言いかけたか。 私の胸のつかえを無理矢理抑え

つけようと、どんなに苦労したか。しかし駄目だった。私がお前にある質問をして、お前に答えて貰おうとする。お前には大変迷惑なことは分っている。しかし、私達は今から結婚するんだ。そうなれば、話はすっかり違って来るじゃないか。もう少しするとお前と私は神の前に膝まづく。しかし、若い男女として膝まづくんじゃないんだ。愛さえあれば後は自然に何もかもうまく行くと信じきっている若い男女としてじゃない。私達はそういう時代を通り越して来たんだ、フィルム。私は五十二、お前は四十八だ。これから踏みしめて行く一歩一歩をよく見つめ、理解し、そして責任をもつて進まなければならぬ。そのまづ第一歩だが、フィルム、お前は何故私と結婚しようとしているか、自分でよく分っているようだ。私には分っていない。私はだ、あの三人のうち、誰か一人が私の子だと、お前が言ったから結婚する。それだけが分っているのだ。

フィルムメーナ それだけ？ 理由は。

ドメニコ いや、それは違う。勿論お前を愛しているからでもある。私達はもう二十五年も一緒に暮してきた。その思い出、歴史、を考えれば、殆ど一生分だ。お前がいなければこの私は、ないも同じだ。．．．いや、本当にそう思っているんだ。お前がいなければ私は駄目．．．これは私の信念だ。私はお前がよく分っている。だからこういう話も出来るんだ。

(真面目に。悲しそうに。) 私はもつ、夜、眠れないでいる。これが十箇月続いている。あの時以来だ。．．．覚えていな？ 私は眠れない。食べられない。どこにも心の平安がないんだ。私がどれだけ悩んでいるか、お前には分らないだろ

う。呼吸をしても途中で止まるような気持だ。こうやる．．．(胸いっぱい空気を吸おうとする。)．．．ところが、ここで止まるんだ。(喉のところを触る。)こんな風にしては生きては行けない。お前は優しい、成熟した女だ。私のことはよく分ってくれている。そして少しは愛してくれてもいるだろう。お前は以前言った。「誓っては駄目。誓わないの、ドウソミー!」．．．だから私は誓わなかった。お前が正しかったよ、フィルム。今の私はこうだ。お前の膝に縋(すが)っている。そうなるだろうとお前が予言した通りだ。膝をついて、お前の両手に、両足に、接吻して．．．教えてくれ。どうか教えてくれ。どれが私の子．．．私の血と肉なんだ! お前は言ってくれなきゃいけない。それで初めてお前が狡くないことになる。そうでなければ、その私の弱みにつけこんで、私を結婚へと追い込んで、そう私は思つかもしれない．．．

いや、お前とは必ず結婚する。それは誓つ!

フィルムメーナ(長い間。その間じつとドメニコを見る。)

あなた、本当に知りたいのね? いいでしょう。教えます。でも、私がそれを言ったとたん、あなたはどうするか、あなた分ってるでしょう? あなたは必ずその子を贖(ひいき)にする。その子をどこへでも連れて行く。その子にいろいろな計画を立ててやる。それに勿論、他の二人より、もっと沢山の金を残してやるうとする。

ドメニコ それで?

フィルムメーナ 分りました。じゃあ、お好きなようにするのね。どうせその子にはそれだけの援助が必要なんですから。四人も子供がいるんですからね。

ドメニコ いかけ屋か！

フィルメーナ（頷く。）水道屋。ロザリアの言い方では。

ドメニコ（傍白。考えているうちにほとんど計画が膨れあがる。）あいつはいい奴だ。なかなかハンサムときてる。それに身体もいい。確かにちよつと結婚を早まったが・・・あんな小さな店じゃ、稼ぎも伸びやしない。援助が必要だ。もう少し資本をつぎこめば仕事場も大きく出来るし、人も雇える。あいつは勿論、社長だ。店を大きくして今どきの器械を入れるんだ。（ひよつとフィルメーナを見る。急に疑惑の雲が湧いて来る。）フン・・・それは何と言つてもいかけ屋・・・水道屋だ・・・それはそうだ。女房も、それに子供が四人もいるんだからな。他の二人より助けがいるに決つてゐる。フィルメーナ（残念そうな表情。）母親なら当り前でしよう？ 一番弱いものの味方になつてやるのが、いいでしょう。見抜かれたら仕方がないわ。頭がいいのね。分りました。言いましよう。リツカルドです。自分で商売をしている。

ドメニコ シャツ屋か。

フィルメーナ いいえ・・・ウンベルト。物書きの。

ドメニコ（頼みの綱も切れた気持。）ああ、この最後の最後になつても、お前は私を助けようとしてはくれないのか。

フィルメーナ（ドメニコの悲しみを見て心をうたれ、何とかして彼の納得の行く説明を与えようとす。）よく聞いて、ダウンミ。そして、もう二度とこの話は蒸し返さないの。

（今まで抑えていたドメニコに対する愛情を一挙に表して。）私は好きだった・・・あなたのこと、昔からずーっと・・・大好きだった。あなたは私の全部だった・・・私は今でもあ

なたが好き。きつと、今までより、もっと、ずっと好き・・・

（自分がこんなに素直になれたことにびっくりして。そして、ドメニコの驚きに気づいて。）あなたのその苦しみて、一体何なの？ ダウンミ。自分でわざわざ呼び込んで来ているものでしょう？ あなたは男が欲しいと思つてゐるものはみんな持つてゐるのよ。健康、容姿、お金・・・それにあなたは、私だつて手に入れている。そう。確かにあなたに心配をかけないためには、子供のことなんかは言わない方が良かったかも知れない。ええ、そう。こうなつたら私、年を取つて、死んで行く時だつて、もうあなたには子供のことは言わない。

・・・そしてあなたは・・・あなたはあの三人の子供を立派に育てた、心の広い人ということになるの。（間。）だから、もう私に訊かないで。私は言わない。言えないの。あなたは私に強要するような野暮な人ではないわね？ 私、あなたを⁴本当に愛しているものだから、気が弱つてゐる時に、いつか漏らしてしまうことがあるかもしれない。でも、そうなつたら大変。何もかも駄目になるわ。分るでしょう？ 水道屋

がさうだつて私が言つたとたん、あなたは浮き上がつてしまつた。お金のことを言い出す・・・それも大金・・・それから、大きな店・・・あなたは当り前のことと言つてしよう。どうせお金はあなたのものでなんですから。でも、続きがあるの、これには。じゃ、どうしてこれをあいつに話して悪い。後の二人は誰の子なんだ。何の権利があつて俺の金を・・・もっと悪いことだつて起きる。金が問題になつたとたん、あの子達は反目するようになる。三人とも大人なんですからね。殺し合いだつてやりかねない。ねえ、ダウンミ。自分のことを

考えないで。私のことも考えないで。あの子達のことを考えてやって。子供達と楽しむ一番良い時期は、もう過ぎていている時に、その痛いところも親に教えてやれないような時。親のところを大きく手を広げて駆け寄って、「パパ！」と叫ぶ時。冷たい手をして、真つ赤な鼻をして学校から帰って来て、「おやつ！」と叫ぶ時。でも、大きくなってしまつたら、大人になつてしまつたら、もうすっかり話は違つたの。(間。)

でも大丈夫。あなたには私がいるの。私、あなたのこと、ちつとも悪く思つてやしない。子供とのことはこのままにしておきましょう。そして私達二人、別の道を行くの。

(舞台裏で、結婚式の讃美歌の練習の音が聞こえる。)

ロザリア(登場。その後が続いてミケール、リツカルド、ウンベルト、登場。)

いらつしやいましたわ・・・神父様が。

ミケール お母さん・・・

ドメニコ(立上り、みんなを見る。そして決心したように言う。)

・・・うん、このままにしておこう。そして我々は二人、別の道を行くのだ。(子供達に。)

お前達三人に言つておくことがある。(三人、緊張して次の台詞を待つ。)

私は紳士だ。君達を裏切る気持など全くない。いいか・・・

リツカルド、ミケール、ウンベルト(一緒に。)

ええ、お父さん・・・

ドメニコ(心をうたれて。フィルメーナに一瞥を与え、決意をこめて。)

有難う。本当に有難う。(事務的な調子で。)

よし。結婚式では通常、花嫁を先導するのは父親だ。今日の場合、父親がいない。だから、子供がその代りをする。君達

のうち二人が花嫁を先導する。もう一人は花婿の介添えだ。

ミケール じゃ、お母さん、僕らが。(フィルメーナの傍に行き、リツカルドに手招きする。)

フィルメーナ(急に何かを思い出して。)

今、何時？

リツカルド 六時五分前です。

フィルメーナ(ロザリアに。)

ロザリア・・・

ロザリア 心配しないで。六時きつかりに、ちゃんとお願い付け通り灯はつきますよ。

フィルメーナ(ミケールとリツカルドの腕に絶つて。)

じゃ、行きましょう。

(三人、書斎の方へ進む。)

ドメニコ(ウンベルトに。)

じゃ君、私の介添えを。

(五人列を作つて書斎に退場。ロザリア、その場に留まつて手を叩く。舞台裏でオルガンが結婚進行曲を演奏する。)

ロザリア、泣く。アルフレード、ロザリアを促し、二人、

書斎に退場。照明、暗くなり、すっかり照明、消える。テラスからゆつくりと月の光がさす。次にシャンデリアが部屋を照す。時間の経過を表す。)

フィルメーナ(書斎から登場。その後ろにウンベルト、ミケール、ロザリア、登場。左手の方に進む。)

ああ、疲れた！

ミケール 休まないで、お母さん。僕達はもう行きます。

明日はまた、朝早くから仕事ですから。

ロザリア(空のグラスを載せた盆をもつて登場。)

おめでとございます。何て素敵な結婚式だったこと！長生きをするんですよ。百歳までね。あなたは私の娘みたいなもの。

リツカルド（舞台裏で。書斎から出てきながら。）素晴らしい結婚式だった。

フィルメーナ（ロザーリアに。）お願い、お水を一杯。

ロザーリア はい、只今、ミスイズ・ソリアーノ。（右手に退場。）

ドメニコ（書斎からとって置ききのワインを持って登場。その封印のワックスの厚さから、それと知れる。）客もなし。披露宴もなし。だけど、内輪でワインぐらい飲まなきゃ。（左手のテーブルから栓抜きを取る。）こいつが眠り薬の役目を果してくれるぞ。

ロザーリア（小さい皿の上にグラスを載せて登場。）はい、お水。

ドメニコ 水？

ロザーリア（ドンナ・フィルメーナに頼まれましたので、と言うように。）奥様に・・・

ドメニコ ドンナ・フィルメーナに言うんだ。今夜だけは水は駄目だつてな。それからルチアに声をかけて・・・おお、忘れてはいかん。アルフレード・アモロソにも頼む。かの有名なジョッキ、競馬馬にかけては右に出るものなしの、通の中の通を。

ロザーリア（右手の方に呼ぶ。）アルフレード、アルフレ！来て、旦那様と一緒に一杯飲んで。ルチ、あなたもよ。

アルフレード（ルチアと共に登場。）はい、只今。

ドメニコ（この時までにグラスに注ぎ終っていて、みんなに配る。）さあ、フィルメ、乾杯だ。（全員に。）乾杯！

アルフレード（飲む。）おめでとございませす。

ドメニコ（愛情をこめて、この昔からの相棒を見て。）俺達の馬がよく走っていた、あの頃を覚えているか？

アルフレード そりゃ、もう。覚えておりますよ。

ドメニコ あいつら、もう走るのを止めちまった。もう大分前から走っちゃいない。しかし、私はそう考えるのが厭でな。頭の中ではいつも奴等が走っていると想像していたんだ。今となってみれば、あいつらがもうずっと前から走ってはいないと認める他はないな。（若い三人を指さして。）今はこいつらが走っているんだ。自分の力がどれだけあるか、試している。連中は若い。サラブレッドの若駒だ。俺達は勝負にならんな。レースからもう外れだ。

アルフレード 外れですなあ・・・すっかり。

ドメニコ さあ、飲んでくれ、アルフレ。（二人、飲む。）⁴

子供は子供・・・一家に三人も四人も子供が出来ると、どうしても父親ってやつはそのうち誰か一人を臍原にしたがるものだ。それも奇妙な理由をつけてな・・・身体が弱いから、顔がみつともないから、他の連中より頑固だから・・・それで他の子供は、別に何とも思わない。それが父親の特権だ、ぐらいに思っている。この家の場合は違つぞ。つい今になつて家族になつたんだからな。これが一番いいのかもしれない。誰かに独り占めされていたかもしれない愛情が、平等に三人に行き渡るんだからな。（飲む。）乾杯！（フィルメーナ、何も言わない。この時までに胸からオレンジの花の花束を取り、時々その匂いを嗅いでいる。ドメニコ、三人の方を向く。）

なあ、お前達、明日は夕食を食べに来るな？

三人 有難つございませす。

リツカルド(フィルメーナに。)僕はもう行かなければ。
(キスをして。)お休みなさい。

ウンベルト(同じようにキスして。)お休みなさい、お母さん。

ミケーレ(キスをする。)お休みなさい。

ウンベルト(ドメニコに。)お休みなさい、お父さん。

リツカルドとミケーレ お休みなさい、お父さん。

ドメニコ(感謝をこめて。)じゃ、また明日だ。

(三人、退場。アルフレード、ロザーリア、ルチーアも、その後から退場。ドメニコ、彼らが去って行くのをじっと見送る。それからテーブルに近づき、グラスに注ぐ。フィルメーナ、肘掛け椅子にどっかと坐り、靴を脱ぐ。)

フィルメーナ 疲れたわ。本当にぐったり。一度にどっと来たわ。

ドメニコ(優しく。)酷い一日だったな、お前には。この二、三日、難問に次ぐ難問だったからな。休むんだ。じっと静かに坐っているんだ。(グラスを取り、テラスの方へ進む) ああ、綺麗な夜だ！

(フィルメーナ、喉の辺りに何かの塊(かたまり)が詰まったような気持。小さな唸り声を出す。じっと空中を見つめ、何かが起つて来るのを待っている。顔が涙に濡れてくる。)

ドメニコ(心配して。)フィルメ、どうしたんだ。

フィルメーナ(幸せそうに。)私、泣いているの、ドゥンミ・・・ああ、何ていいんでしょう、泣けるって。

ドメニコ(優しく、フィルメーナを抱擁する。)ほら、もういいんだ。お前は走り続けたんだ・・・走り続けだ。そ

して障害にあつて、バツタリ倒れた。しかし、起き上がった。また自分を取り戻した。その胸に耐えきれない重荷を抱えていた、すっかり疲れたんだ。もう終だ。走るのは終だ。心配も止めるんだ。よく休むんだ。(テーブルに行き、また注ぐ。)子供は子供・・・扱いは同じにしなければ。お前が正しいよ、フィルメ。お前の言う通りなんだ。(ワインをぐっと飲む。その時・・・幕)

平成十四年(二〇〇二年)五月二十六日 訳了

<http://www.aozora.gr.jp> 「能美」の項 又は、

<http://www.01.246.ne.jp/~tnoumi/noumi1/default.html>

This (English) version was first produced in Great Britain on BBC Radio 4 on 6 May 1988 with the following cast:

Domenico	Robert Stephens
Filumena	Billie Whitelaw
Alfredo	Peter Sallis
Rosalina	Patricia Hayes
Diana	Joanna Mackie
Lucia	Joan Walker
Nocella	Laurence Payne
Umberto	Ian Michie
Riccardo	Mark Straker
Michele	Ken Cumberidge

Directed by Glyn Dearman